Ⅴ　研究活動－資料紹介・研究ノートなど－

1　新潟市西区六地山遺跡出土弥生土器の再検討

(1)　はじめに

2017年１月４日～３月26日、史跡古津八幡山　弥生の丘展示館企画展４「邪馬台国の時代４　古津八幡山の頃の信濃川左岸の世界－六地山遺跡里帰り展－」で信濃川左岸の遺跡から出土した弥生時代中期後半から後期の遺物とともに、新潟市西区の六地山遺跡出土遺物を展示した。現在六地山遺跡出土資料は、大半が長岡市立科学博物館所蔵になっているので、サブタイトルして「六地山遺跡里帰り展」とした。

六地山遺跡は古津八幡山遺跡と同じ弥生時代後期の遺跡である。丘陵上に立地する古津八幡山遺跡に対し、海岸砂丘上に立地する遺跡として、古津八幡山遺跡を理解する上で看過できない重要な遺跡の一つである。

六地山遺跡出土資料は、1956年発掘調査資料（長岡市立科学博物館所蔵）・真島衛氏採集資料（真島家所蔵）・金塚友之亟氏採集資料（新潟市歴史博物館所蔵）が主なもので、この他、新潟市教育委員会が確認調査を行った資料がある〔甘粕・小野ほか1986〕が、資料の大半は長岡市立科学博物館所蔵資料が占めている（注１）。

企画展のために、長岡市立科学博物館から六地山遺跡出土品を借用し､2016年４月～ 2017年６月にかけて接合･実測・集計などの再整理作業を行った。限られた期間内の作業だったために不十分ではあったが、接合作業によって新たに器形が復元されたものも少なくない。また、真島衛氏採集資料と金塚友之亟氏採集資料中に、今まで知られていなかった続縄文土器を確認することができた。

長岡市立科学博物館所蔵資料は、新潟市史編さんの際にも借用され､『新潟市史　資料編１　原始古代中世』に実測図等が報告されている〔新潟市史編さん原始古代中世史部会編1994〕（注２）。現在、出土遺物は同館の伝統的な木箱に入れられており、遺跡名・出土地点を示す紙ラベルが貼られている。借用時には木箱内に新潟市史編さん時のメモ書きが幾つか残されていた。なお、資料返却時には、借用時の旧状に復するように木箱に戻し、接合したものや同一個体と考えられる個体はビニール袋に入れて最も個体数の多い木箱に戻すようにした。接合などで木箱に入らなくなった遺物は、プラスチック製コンテナに収納して返却した。また、遺物を借用する際に、発掘調査時の測量図面等の記録類の所在を照会したが確認することはできなかった。写真はフィルムからデジタル化したデータの提供を頂いた。この他に、故関雅之氏からも青焼きの現況測量図、発掘調査写真を提供して頂いた。図３はそれらを基に作成したものである（注３）。

今回、六地山遺跡出土土器の図化作業を行い再報告する目的は、新潟市域における弥生時代後期の社会を解明するうえで重要な資料であること、そして、前述したように国史跡古津八幡山遺跡の動態を考察するうえでも、六地山遺跡そのものの評価をする必要があると考えたからである。後に詳しく記すが、六地山遺跡の所属時期は従来、北陸系土器と東北系土器は別時期で、前者が後期前半、後者は後期後半とされてきたが、今回の再検討によって両者は同一時期で後期前半に所属させるべきであると認識するに至った。天王山遺跡天王山式期以前である。天王山遺跡とほぼ同じ頃に古津八幡山遺跡の高地性環濠集落も成立する激動の時期直前の頃である。

(2)　六地山遺跡の概要（図1～図5）

六地山遺跡は新潟市西区曽和・内野戸中才・内野潟端・内野早角・田島に所在する。ＪＲ越後線内野駅から1.2kmほど南にあり、周囲を低湿地に囲まれた砂丘上（新砂丘Ⅱ-1）に立地する。現在は海岸線まで直線距離で約２km程であるが、当時は新砂丘Ⅲの形成途上と推測されるから、海岸線までの距離はもっと近かったと考えられる。また、日本海に近いだけではなく、西川（信濃西川）の河口・河道にも近い交通の要衝であったと推察される。周辺の代表的な遺跡として、砂丘上に立地する緒立遺跡（縄文晩期、弥生前期～中期初頭、古墳早期、古代）と四十石遺跡（縄文、弥生、古墳早期・前期、古代）がある。本遺跡とは時代が異なるが、両遺跡からは各地域からもたらされたと考えられる遺物が出土しており、物流や交易に関係する遺跡であったと推察される。この六地山遺跡の立地条件は遺跡の性格を理解する上で重要であることを強調しておきたい。

1956年の発掘調査は寺村光晴氏が『上代文化』第30輯に「越後六地山遺跡」として報告されているので〔寺村1960〕、これによって発掘調査当時の遺跡の状況を簡単に記しておこう。

六地山遺跡は弥彦山・角田山が一望できる場所にあり、1944年頃までは松林であったが、戦時中の食糧増産のために開墾され畑地となった。遺跡がある砂丘は平野部に突出しているため季節風による風侵が甚だしく、さらに砂丘の中央を南北に幅３ｍの農道が造成されてからは採砂場となり、遺跡は湮滅寸前の状態であったとい

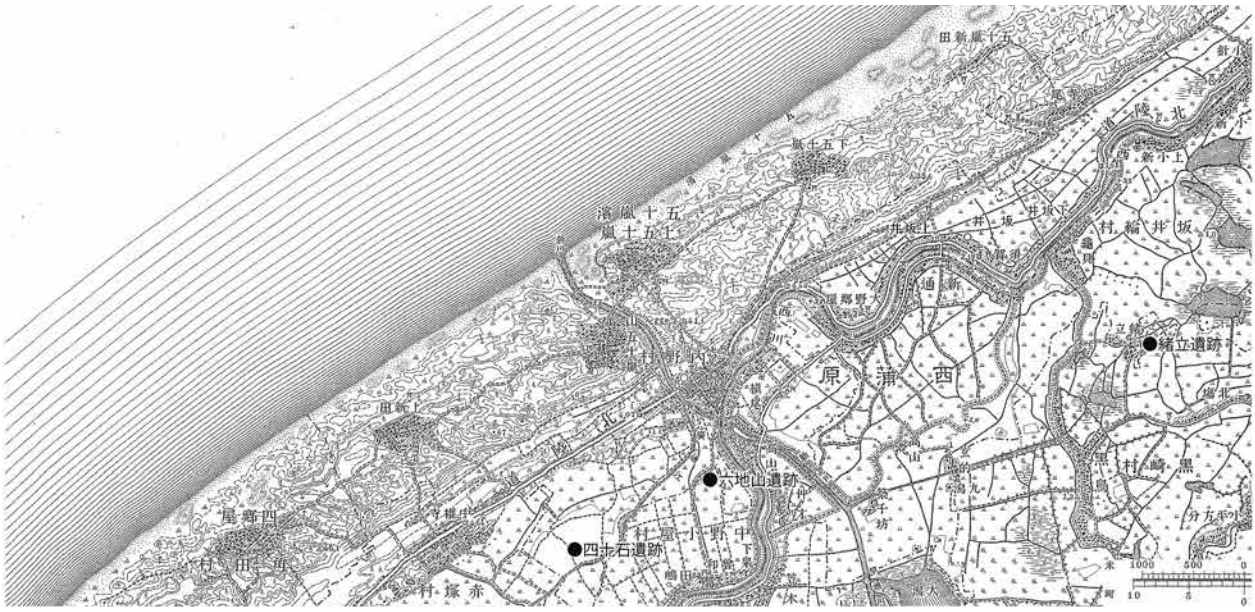

図１　六地山遺跡位置図（1911年測図、1914年製版　内野1/5→1/7.5万）

図２　六地山遺跡周辺の空中写真（1948年米軍撮影）

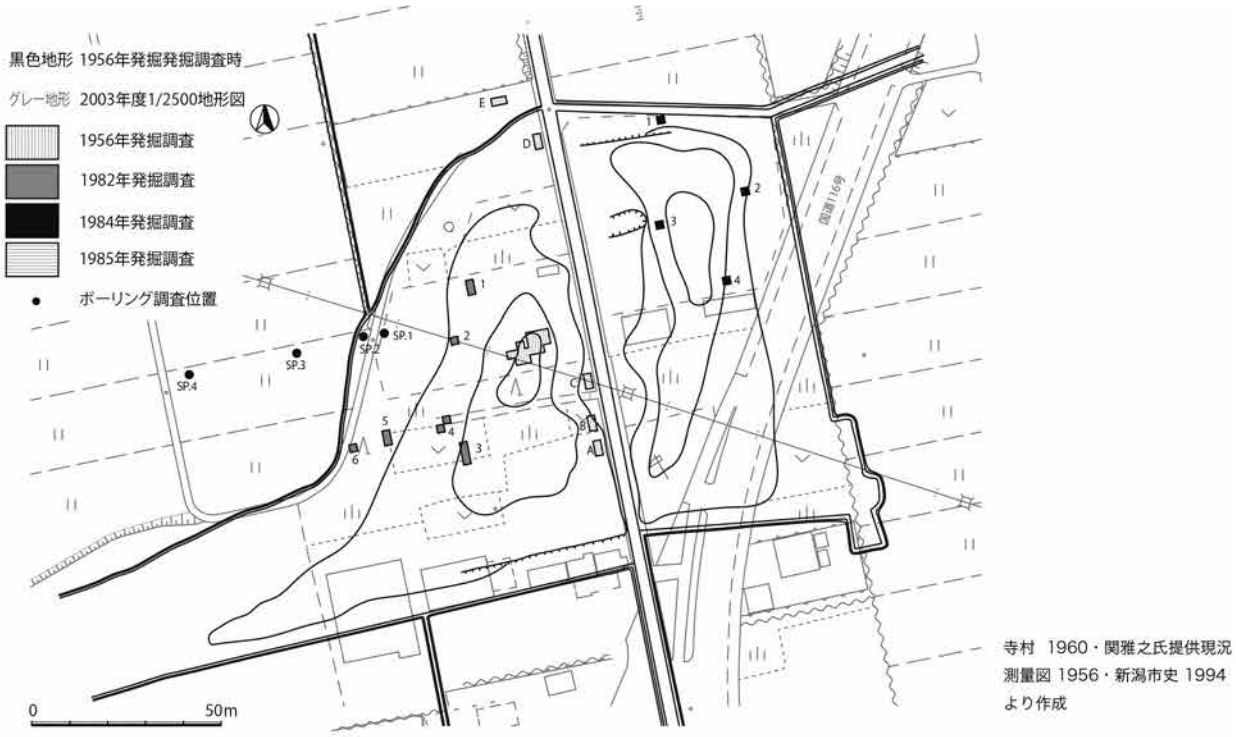

図３　六地山遺跡発掘調査位置図

う。開墾時に石鏃が多数出土し、「作業中に人骨・蔵骨器・直刀等が道路北側から発見され」たとされているが、直刀は、当時もその所在は不明だったようである（注４）。

1955年に、弥彦神社（弥彦山信仰）の研究のために西蒲原郡内の遺跡踏査をしていた真島衛氏が、六地山遺跡を訪れたところ、「刷毛目のある弥生式土器」と共にそれまでに知られていない「縄文土器とは明らかに異なる縄文のある土器」があることに注目した。その後、平野部にある弥生時代の集落を解明することと、遺跡の湮滅を防ぐことを目的として発掘調査が計画された（注５）。

発掘調査は真島氏が経費を負担し、長岡市立科学博物館の中村孝三郎氏らによって行われた（注６）。調査は畑の休閑期を待って、1956年12月10日から14日の５日間行われた。発掘調査写真を見ると白く雪が積もっており、故関雅之氏によれば季節風も強く、とても寒かったらしい。発掘調査には真島氏・中村氏のほか、寺村氏・関氏、地質調査担当として津田禾粒氏らが参加した。

発掘調査面積は、２×２ｍの調査区で14か所、面積56㎡であった。報告された調査区の図面によれば、１～11･13区は２×２ｍ、12区のみが２×４ｍとなっている。「２×10mの第１溝を東西に切り」（１～５区）、「その西北（東北）に接して６×４ｍの第２溝を設定」（６・７・10～12区）された。

基本層序は、上から、表土層約15cm、黒褐色の腐植砂層約60cm（遺物包含層）、褐色の純砂層（無遺物層）であった。「腐植砂層は砂丘頂部に厚く、中腹より末端にかけて漸次薄くなり、丘裾部では全くみられな」〔寺村1960〕かった。

当時の写真を見ると、まだ小高く砂丘列が残っていたことがわかる。砂丘北東端で水田面との標高差約３ｍの小高いところが遺跡の中心であった。発掘調査によって平箱11箱の土器片や石の剥片、全体が復元できる土器12点が出土した。

遺跡及び周辺では、1956年以降の開発等で砂丘上にある遺跡中心部は削られ、建物や資材置き場ができ、遺跡東側には国道116号が通ったために、現在では旧状を殆ど留めていない。六地山遺跡や周辺では、これまでに10回以上の試掘確認調査が行われており、砂丘上は削平され旧地形を保っていないが、部分的に遺物包含層が遺存している箇所も確認されている。

1982年の遺跡分布調査では、発掘調査が行われた遺跡北東から南西方向に長さ約950mの範囲に遺跡が広がっていることが確認されている〔甘粕･小野ほか1986〕。また、遺跡が立地する砂丘列は、もともとは北東側で標高が高く、砂丘列の幅も160m程と広かったが、南西に行くにつれ低くなり、幅も10m程に狭くなっていたことや、ボーリング調査や確認調査の成果により、西側や北側の水田面下から埋没した砂丘や弥生時代後期の遺物包含層である黒褐色砂層が良好な状態で遺存していることが判明している。また、水田部分では３～４ｍの深度まで遺物包含層が確認されているが、さらに深い場所まで広がる可能性が指摘されている。六地山遺跡からはこれまでの調査で弥生時代後期を中心として、奈良・平安時代、中世の遺物も出土している。また、1956年の遺跡発掘調査は、新潟市域で最初に行われた事例としても特筆される。

（3） 1956年発掘調査出土の弥生土器

（図6～16、表1～3）

再整理では接合作業と併行して、遺物の注記を基に調査区別の集計を行った（表１）。注記の「Ｒ」は六地山、Ｒに続く数字は調査区、「Ｓ」は１～３までしかないので層位と判断した。１が表土層、褐色の純砂層は無遺物層なので、２・３は「腐植砂層を上下二層に分け」た〔寺村1960〕とする記述に対応するものであろう。裾部にあたるＲ４・Ｒ５にＳ３がみられないこともセクション図と対応する。また、Ｒ10にしかない「no」は番号を付けて個別に取り上げたもの、「マ」は真島、「表」は表採であろう。

この集計作業によって気づいた点を簡単に記しておこう（表１）。土器小計をみるとわかるように、１・２・13区で多く、これらの調査区の１・２層からは土師器や中世のかわらけも多く出土しており、報告に書かれているように既にかなりの攪乱が進んでいたものと推察される。表採点数が多いこともそのことを裏付けている。「縄文のある土器は下層に多いが、刷毛目の土器と混在していたことが注目された。」〔寺村1960〕とする傾向は集計結果からはうかがえなかった。しかし、報告に記載があり図示されている剥片が10区に集中する点は集計からも確認された。Ｒ10Ｓ３から74点と最も多く出土しており、黒褐色砂層（Ｓ３）はそれ程攪乱を受けていないように見受けられる。

弥生土器のほかに石器や剥片、古代の須恵器・土師器や中世の遺物、鉄器・鉄滓等も多数出土している。156点もの剥片や７点の石鏃・管玉があったが時間的な制約から図化しなかった。また、「六地山遺跡の発掘では、中層から原形不鮮明な鉄滓片が十数点検出されている。この地点は土器包含の原層序に攪乱がなく、残滓鉄片は後期弥生式土器に附随したものとみられる。」〔中村1966〕とされる鉄器？もあったが、同様に実測をしていない（図25）。これまで、新潟県内の弥生時代鉄器集成リストに入れられることのない資料なので、もし記述のとおり弥生時代の鉄器とすれば重要であり、今後精査が必要であ

表１　調査区別の遺物集計表

調査区	弥生時代					弥生時代				古代		中世				古代か中世		時代不明	
	ハケメ等	縄文	櫛描	その他	土器小計	石鏃	剥片	管玉未成品	勾玉	須恵	土師	珠洲	かわらけ	瀬戸	中世陶器	砥石	鉄滓等	礫	軽石
R 1 S 1	131	11	2		144		1			2	20	2	8						
R 1 S 2	442	96	1	5	544		5				33		15				4	7	
R 1 S 3	99	20			119		1					1					2		
R 2 S 1	161	24			185		3			2	104		19				1	2	
R 2 S 2	267	52			319		3			1	25		8				2	1	2
R 2 S 3	88	22			110					1	4							2	
R 3	69	7	1		77					1								4	
R 3 S 2	133	54			187		1			1	1							5	1
R 3 S 3	4				4												1	1	
R 3・4 S2かS3	21	2			23														
R 3・4 S 2	13	7			20														
R 3・4 S 3	23	4			27						1								
R 4 S 1	51	9			60													4	
R 4 S 2	105	30			135						1								
R 5 S 1	44	8			52		1										1	2	
R 5 S 2		1			1														
R 8 S 1	71	9			80		1			1	3		3				1	4	1
R 9 S 1	33	1	1		35														
R8S1かR9S1	30	2			32						1								
R 10 S 1	117	37		1	155		9				1		3				1	6	3
R 10 S 2	132	19			151		19				1								
R 10 S 2no2	3	1			4		2												
R 10 S 2no3	31	1			32		1												
R 10 S 2n3	2				2		1												
R 10 S 3	31	4	1		36		74				1							3	3
R 10 S 3n3	1				1														
R 10 下 no1	28	1			29														
R 10 下 n1	15	1			16		6												
R 10 下 no2	15	23			38		1												
R 10 下 n2	13	1			14		7												
R 11 S 1	109	26			135		8			9	6				1		1	4	
R 11 S 2	99	34			133		3				2							2	
R 11 S 3	1				1														
R 12 S 1	16	2			18		1			8	11		4				1		
R 12 S 2	87	19			106		1			1			8				1	4	
R 12 S 3	8				8														
R 13	269	68	1		338		4			3	7							15	1
表採　六地山	551	63			614		3			28	32	2	3	1	12	1	4	28	
マ	4	5	1		10														
注記なし	55	28	2		85	1		1	1	1							5	3	
合計	3,372	692	10	6	4,080	1	156	1	1	59	254	5	71	1	13	1	25	97	11

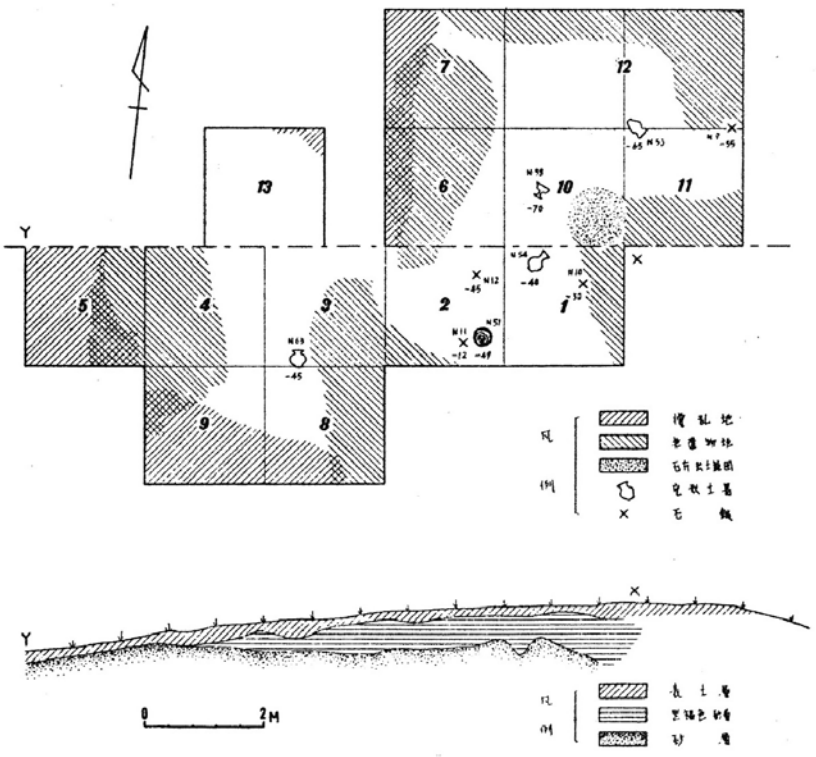

図４　六地山遺跡調査区設定図（寺村1960に拠る）

表２　東北系土器と
北陸系土器の点数

系統			点数
東北系		口縁部	84
		底部	12
		体部	596
		合計	692
器種	甕		67
	壺		3
	その他		3
縄文種類	縄文	RL	457
		LR	179
		無節R	3
	附加条1種	＋L	1
		＋R	8
	附加条2種	＋L	0
		＋R	18
	撚糸文	絡条体L	13
		絡条体R	9

系統			点数
北陸系		口縁部	238
		底部	71
		体部	3,063
		合計	3,372
器種	甕		201
	壺		20
	高杯		12
	器台		7
	鉢		15

7：No.1口縁部、8：No.3とNo.296、10：No.147か？

図5　1956年発掘調査写真（1～9：長岡市立科学博物館提供、10・11：関雅之氏提供）

ろう。ここでは、実測作業を行った弥生土器に限って報告することとしたい。『新潟市史　資料編１　原始古代中世』〔1994〕との対応は表３に示した。

弥生土器の概要　図版は、Ａ東北系列、Ｂ折衷系列、Ｃその他系列、Ｄ北陸系列の順で報告し、前２者は器形のわかるものを先に図示した。各系列の詳細は後述する。

まず、弥生土器全体の量比をみておこう。集計作業時点ではＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの区分を明確にしていなかったので細別は明らかではないが、縄文が施文される土器（Ａ東北系列）692点、ハケメ・ナデ・ミガキ等で縄文のない土器（Ｄ北陸系列+Ｂ折衷系列+Ｃその他の系列）3,372点で、両者の比率は17％：83％となる（表２）。北陸系が多く、東北系土器が少ないという結果は、天王山式系土器分布の外殻圏としての地理的特徴を示していると言えよう。

古津八幡山遺跡では出土点数が膨大なため、破片1点ずつの集計を行っていないものの、報告遺物ではＡ群北陸系36％、Ｂ群東北系46％、Ｃ群在地折衷系18％の比率であったが、これは東北系土器を多めに図化報告したから、実態としては約40％：40％：20％と推定している〔渡邊2001〕。古津八幡山遺跡は４期ないし５期に細分される長期に継続する遺跡なので一概には比較できないが、概ね東北系40％：北陸系＋折衷系60％となるから、六地山遺跡と古津八幡山遺跡の系統別の比率は大きく異なる。六地山遺跡に比べ古津八幡山遺跡では東北系土器の比率が高いと言える（注７）。

また、Ａ東北系列の縄文原体を１段目のＬとＲ（以下、山内清男氏の表記に従ってⓁ・Ⓡとする〔山内1979〕）で集計するとⓁが471点、Ⓡが217点で、比率では68％：32％となる。古津八幡山遺跡ではⓁとⓇの比率は30％：70％なので、両者の比率は逆転していると言える。

遺物報告番号の下に併記した記号は土器に記された注記である。複数破片が接合する個体は大破片、破片数の多い順に記した。なお、完形土器は底部に書かれた注記が摩滅して判読できなくなったものが多いが、図面・写真から147が11・12区間、280が１区、296が10区と推察される。296は３と共に出土したと記録されており〔寺村1960〕、出土状況の写真も残されている（図５）。

Ａ東北系列（図６－１～図10－140）

全体の器形のわかるものを先に図示し、さらにヘラ描沈線文を持つもの、持たないもの、さらにそれぞれ１段Ｌ（Ⓛ）、１段Ｒ（Ⓡ）、地文のないもの（無地文）の順で図示している。

器形　器種は甕が主体で壺（３・５など）もある。甕と壺の区分は曖昧で、４・143・147などは広口壺として括ることができる。脚部が１点ある（138）。また、赤彩さ

表３　新潟市史対応表

報告番号	市史	
	図版	番号
1	40	159
2	40	157・158
3	40	168
4	40	156
5	40	181
6	40	163
7	40	162
8	40	165
9		
10	40	167
11	41	192
12	39	135
13	40	160
14		
15	41	193
16	40	161
17		
18	40	164
19	39	131
20	41	191
21	39	130
22	39	140
23	39	137
24	40	179
25	40	180
26	40	166
27	40	177
28	40	174
29		
30		
31	40	173
32	40	178
33	40	171
34	40	170
35	41	195
36		
37	40	169
38	40	172
39	40	175
40		
41		
42		
43		
44		
45	40	182
46	40	183
47	38	123
48	38	122
49	38	120
50	39	136
51	39	138
52		
53		
54	39	128
55		
56		
57		
58		
59		
60	38	118
61		
62		
63		
64		
65	41	190
66	39	134
67	39	129
68		
69	39	133
70	39	124
71		
72		
73		
74		
75	38	117
76	39	132
77	39	125
78		
79		
80	39	147・149
81	39	146
82	39	148
83		
84		
85	39	154
86		
87		
88		
89		
90	39	145
91		
92	39	152
93		
94		
95		
96		
97		
98	39	153
99		
100		
101		
102	41	201
103	41	200
104	38	113
105		
106		
107	38	121
108		
109	38	112
110	38	114・116
111	38	115
112	39	139
113	39	143
114		
115		
116	41	189
117		
118		
119		
120		
121	39	127
122	39	126
123	36	38
124		
125		
126		
127		
128	39	155
129		
130		
131		
132	39	151
133		
134		
135		
136		
137	39	150
138	41	204
139	41	198
140	41	197
141	255	11
142	36	46
143	37	80
144	35	6
145	35	5
146	36	34
147	37	70
148	39	142
149	39	141
150		
151	37	79
152		
153		
154	36	36
155		
156		
157		
158	36	41
159	40	188
160		
161		
162		
163		
164		
165		
166		
167	36	45
168		
169		
170		
171		
172		
173		
174	38	109
175	36	42
176	36	43
177	36	40
178	36	44
179		
180		
181		
182	40	187
183	36	64
184	36	62
185	36	60
186	36	59
187		
188		
189	36	65
190	36	63
191	40	184
192	36	61
193	41	196
194	40	185
195	40	186
196		
197		
198		
199		
200		
201	40	176
202		
203		
204	41	194
205		
206	35	4
207	35	1・2
208	35	9
209	35	3
210		
211	35	10
212		
213	36	53
214		
215	35	17
216		
217		
218	38	103
219		
220	35	18
221	35	15
222	36	28
223	35	8
224		
225	35	12
226	36	31
227	36	27
228	36	26
229	37	69
230		
231	35	11
232	37	72
233	36	29
234	36	30
235	37	76
236	35	13
237	35	14
238	36	25
239	35	23
240		
241	35	22
242	36	37
243	35	7
244	36	33
245	36	32
246		
247		
248	35	21
249		
250	35	20
251		
252	35	19
253		
254	35	24
255		
256		
257		
258		
259		
260	36	39
261		
262		
263		
264		
265	36	47
266	36	51
267	36	57
268	36	48
269	36	52
270	36	49
271	36	50
272	36	55
273	36	54
274	37	75
275		
276		
277		
278	37	74
279	37	66
280	37	68
281	37	78
282		
283		
284		
285		
286		
287		
288		
289	37	77
290	36	58
291	37	82
292	38	101
293	36	35
294		
295	38	98・99
296	38	102
297	38	100
298		
299		
300		
301	38	105
302	37	73
303	37	81
304	37	71
305	38	104
306	38	111
307	38	108
308		
309	38	106
310	38	110
311	38	107
312	37	95
313	37	96
314	37	86
315	37	92
316	37	84
317	37	93
318		
319	37	88
320	37	91
321	37	89
322	37	90
323	37	87
324	37	85
325	37	94
326	41	203
327		
328	37	97
329	37	83

れた壺が１点あるが少ない（11）。口縁部は、天王山式土器の特徴とされる内湾したり（４）、肥厚したりするもの（１・２）もあるが明確ではなく、くの字状の頸部から肥厚せずに伸びる甕が多い（47・48、104～107・109）。これらの例は北陸系との折衷土器とする見解もあろうが中期的な器形とみることもできる。110・111は両者の中間的な例。沈線文様のない粗製土器には口縁部と頸部との境が屈曲したり、明瞭な段を設けたりするものも多い。

文様帯・文様　従来から指摘されているように、刺突列や指頭押圧はあるが（10・11・19・20～23）、天王山式土器の特徴である交互刺突文は１点もない。沈線文様のある個体そのものも少なく、縄文のみのいわゆる粗製土器が多い。１以外には明確な磨消縄文はない。これらの諸要素が、狭義の天王山式（天王山遺跡天王山式）よりも新しい根拠とされてきたのである。

天王山式土器の文様帯は鈴木正博氏によってⅠ・Ⅱａ・Ⅱ・Ⅲ文様帯からなるとされている〔鈴木1976〕。狭義の天王山式に属さない本遺跡の土器群をこの文様帯で説明するのは本来的には適さないのだが、別の名称で説明すると煩雑になるので、便宜的にこの文様帯に従って説明しよう。

口縁部Ⅰ文様帯には上向きの弧線文（10・13・15・16・24）、鋸歯文（２・７・14・26・76・77・132・133～138）がある。15は上向きだけではなく下向きの連弧文も入れる（注８）。１は文様帯下端が下向き連弧状になるもので、交点に棒状施文具で刺突を入れている。天王山式土器の特徴の一つとされる口縁部に突起が付くものや、波状口縁になる例はあるが少ない（２・４・５・10・26・65）。日本海側で多い口縁部の縦の刻み目はなく、端部に方向を変えて入れられる「ハ」の字状の刻み目列は２にその可能性があるだけである。内面施文には、刺突列と平行沈線が併用されるもの（13）、刺突列（15）、縄文施文（48・65・69・109・110・117・122）がある。

ヘラ描沈線文を入れる個体数が少なく、Ⅱ・Ⅱａ文様帯の構図は明確ではない。間延びした連弧文（27・28）はあるが、重菱形文は１点もない。なお、頸部Ⅱａ文様帯を無文とする例は多い。

体部Ⅲ文様帯上端には鋸歯文（2）、上向きの連弧文（３～５）がある。天王山式に一般的な下向き連弧文（34・37）はあるが少ない。先端の広い浅い沈線による２条・３条の上向き連弧文が定量あるのが本遺跡の特徴である。

施文法　縄文はⓁとⓇがあるが、前述したように両者の比率は７：３でⓁが多い。細い原体よりは、太い単節の原体が多い。ＲＬ原体は斜位押圧により条が縦走する例が定量ある（1・47・66・80・81・91）。ＬＲは原則として横位押圧による斜縄文で、横走縄文は希少（37）。撚糸文（単軸絡条体第１類）はＬ（76・77・93～95）、Ｒ（２・20・118・131～138）と判断したが、93～95は細い原体ＲＬの縦走縄文、131・132は附加条第１種かもしれない。23も附加条第１種で軸縄にＲを一本絡げたもの。附加条第２種が３点あり、何れもＬＲにＲを絡げている（48・107・108）（注９）。

縄文原体の側面押圧がみられる（１・４）。１はＲＬ縄文を肥厚させた口縁部Ⅰ文様帯の下端に沿って弧状に押圧し、頸部Ⅱ文様帯上端に１条、下端に２条押圧する。４は口縁端部と文様帯の区画にＬＲ縄文の側面押圧を入れ、Ⅱａ・Ⅱ・Ⅲ文様帯を区画する。なお、同一個体にⓇとⓁを併用するものはみられない。

Ⅱａ文様帯直下、Ⅲ文様帯上端（石川は「Ⅲａ」文様帯とする〔石川2001〕）はＲＬ原体を斜位押圧することにより条が横走する例（１・47・80～82・85・86）が、斜走する例（84・87～89）よりも多いのが特徴（注10）。横走縄文は底部下端にもみられる（100～103）。また、この一群のⅢ文様帯はＲＬの斜位押圧により条が縦走するのが一般的だが（47・80・81・91・92）、太い縄文は帯状にならず（47・85）、細い縄文（81・91・92）が帯状になるようだ。斜位押圧はⓇ原体にはみられない施文法であり、Ⅲ文様帯上端や底部下端以外では縄文が羽状になることはない。太い縄文が用いられたからか、粘土の乾燥が進まないタイミングで施文されたからか、縄文が深くしっかりと付いている個体が目立つように思われる。後に触れるが、これらの一群は山内清男氏が指摘しているように〔山内1964・1979〕、本遺跡の東北系列の系統を考える上で極めて重要な要素である。

一方でⓇ原体にしかないものとして無節縄文（38・104～106・109・114）と附加条第２種（48・107・108）がある。縄文とハケメが併用される例もみられる（31・75・88・96・98・128）。80はハケメというよりも条痕に近い施文具で頸部に縦ハケを入れるが、頸部の縦ハケは確認調査資料の図22-1・図23-1にも特徴的にみられる。

沈線文は太く深いものの他に、浅くて２本単位かと思われる例が目立つ（４・13・16・24・25・46）。２・３は３本同時ではないが３本の沈線を引く。

①ヘラ描沈線文のある一群（1～46）　１はＲＬ、２はＲ撚糸文、３・４はＬＲ、５は無地文である。地文は、口縁部はⓁ（６～14・19）・Ⓡ（15～18・20～23）・無地文（24～26）、体部はⓁ（27～35）、Ⓡ（36～39）、無地文（40～46）である。16・24・25・48は２本描沈線文。10・11・12・19～23はⅠ文様帯下端に刺突列を入れる。器種には壺・甕があるが、壺が主体となる。

代表的なものだけに説明を加えよう。

１は口径約30cmの大形の甕。本遺跡でほぼ全形がわかる唯一の精製土器である。肥厚したＩ文様帯は下端部を下向きの連弧状とし、全面にＲＬ横走縄文を施文後、下端部には形状に併せて連弧状に側面押圧１条を入れる。そして下端頂部には棒状施文具で下から上へ刺突を入れる。頸部Ⅱａ文様帯は縦走縄文を施文後、Ｉ文様帯肥厚部直下（Ⅱａ文様帯上端）に連弧状の側面押圧を１条、さらに文様帯下端に２条の側面押圧を入れる。Ⅱ文様帯は浅い沈線で双頭渦文と台形文に由来する文様（仮称円台形連結文）を入れ、縄文が充填される。復元された部分が多いが、６単位に復元されている。その下には２条の平行沈線を入れ、Ⅲ文様帯は最上部のみ横走縄文、体部は帯状の縦走縄文となっている。原体はＲＬであるが１段の縄の太さが異なり、細・太２種類が用いられる。Ⅱ文様帯に入れられた文様は、秋田県はりま館遺跡など（図26-46）、Ⅱａ文様帯に重菱形文を入れる土器のⅡ文様帯の様々な構図の一つとして入れられる円台形連結文に由来する。円台形連結文は、円形と台形が組み合わされた文様で砂山遺跡の壺形土器の肩部に入れられた構図（図26-7）なども同系統であるが、１の構図は円形と台形に上下に分離してできたものと考えられる。

２は肥厚したＩ文様帯、無文のⅡａ文様帯、Ⅲ文様帯からなる甕。地文に絡条体Ｒを斜位に施文する。Ⅰ・Ⅲ文様帯には３本の沈線で振幅の大･小の鋸歯文を入れる。口縁部には突起が付き、口縁端部にはキザミを入れる。

３はＬＲ地文のⅢ文様帯に３本の上向き連弧文を入れる壺。連弧文の施文方向は左から右、施文順位は右から左。その上に２条の平行沈線を入れるが、Ⅱ文様帯に沈線文様を持たない。体部下半はヘラナデ。

４は３･５と同じ文様帯構成を持つ甕もしくは広口壺。やや内湾する口縁部に４か所の突起を持つが、１か所のみ山形､他の３か所は山形の頂部を刻む。Ｉ文様帯下端、Ⅱａ・Ⅱ・Ⅲ文様帯間にはＬＲ側面押圧を入れる。Ⅲ文様帯上端には先端が２本（上が広く、下が狭い）になった施文具で上向き連弧文を入れ、その下にはＬＲの斜縄文を施文する。

５は無地文でⅢ文様帯に先端の平たい施文具で上向き連弧文を入れる壺。３に似る器形で、文様帯間を２条の沈線で画する。

３～５はヘラ描沈線文を持つとは言え、Ⅱａ文様帯を無文とし、Ⅲ文様帯上端に上向き連弧文を入れるだけの半精製土器とでも言うべき例。３・５は壺、４も同じ文様帯構成なので甕とするよりは広口壺とするべきであろう。なお、35は小形壺である。

②沈線文様のない一群（47～140） 前述したようにⓁ・Ⓡの順で図示した。Ⓛ（47・49～103）、Ⓡ（48・104～140）である。単節縄文以外では、76・77・93～95が絡条体Ｌ、104～106・109が無節Ｒ、48・107・108がＬＲ＋Ｒ附加条第２種、118・132～138が絡条体Ｒである。109はＬＲとＲを併用している。器種には甕・壺があり、台部が１点ある。60・80・81や90など頸部がすぼまるものは壺になろう。66～68は広口壺の口縁部であろう。

甕・広口壺の口縁部は無段・有段のものがあり、その順で図示した。口縁部を有段としない無段の例が多いのも本遺跡の特徴と言える。Ⓛは無段（47･49～64）､有段（65～79）、Ⓡは無段（48・104～111・114）、有段（112・113・115～123）である。口縁部が内湾するものは有段のものが多く、伸長するものは無段のものが多い。平口縁が一般的だが、小波状となる例（50）もある。頸部は原則として無文であるが、無文としない48は口縁部と体部で施文方向を変えている。口縁部内面にも縄文を施文するものは48・65・69・109・110・122である。

47・48は縄文原体は異なるが、口縁端部を強くなでて平坦にし、内側につまみ出す点が酷似する。109も口頸部を横方向にナデ、口縁端部をやや厚くしている。ＲＬのみⅢ文様帯上端（Ⅲａ文様帯）に横位もしくは斜縄文を施文する例があることは前述した。また、口縁部Ｉ文様帯に縄文を縦走させる例はＲＬに限られる（47・59・66）。

Ｂ折衷系列（図10-141～図11-182）

口縁部の横ナデが不明瞭なもの、北陸系の器形でありながら、縄文を施文する例（148～150）を本群とした。器種には甕・壺がある。

縄文施文土器以外の器面調整はハケメかナデが基本。141・142は口縁部内外面を横ハケで調整する例。143・147・151は内湾する口縁部と筒状の頸部を有する広口壺。器面調整も細かいハケメ・ナデで共通している。143は肥厚有段口縁に、中央にキザミを入れた突起と片口が１か所ずつ残る。有段口縁下端には棒状施文具による刺突列を入れる。151は内湾肥厚する有段口縁端部と肩部にヘラキザミ（刺突列）を入れる。外面縦ハケ、内面は横ハケである。肩部のヘラキザミは甕には一般的だが、壺では稀。折衷土器故であろう。147は内湾する口縁部に筒状の頸部を持つ。口縁部の横ナデが不明瞭で、口縁部が平坦ではないこと、さらに143同様に筒状に直立する頸部を天王山式系の影響と考えた。

144～146は口縁部の横ナデが不明瞭で、口縁部に縦のキザミを入れたり、肩部に刺突列を入れたりする。肩部の刺突列は北陸系土器にも見られるが、口縁部に縦のキ

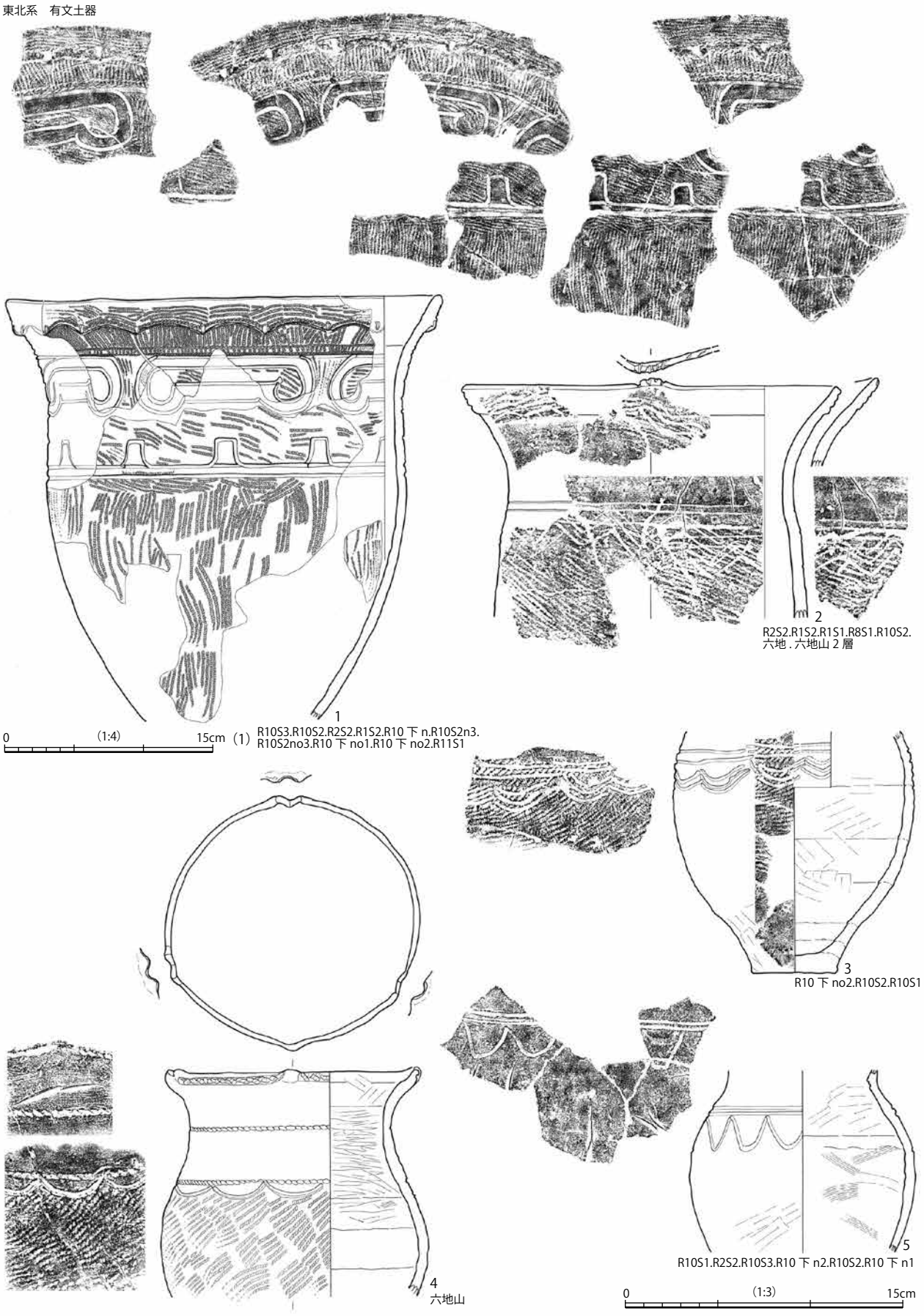

図 6　六地山遺跡遺物実測図（1956年発掘調査資料1）

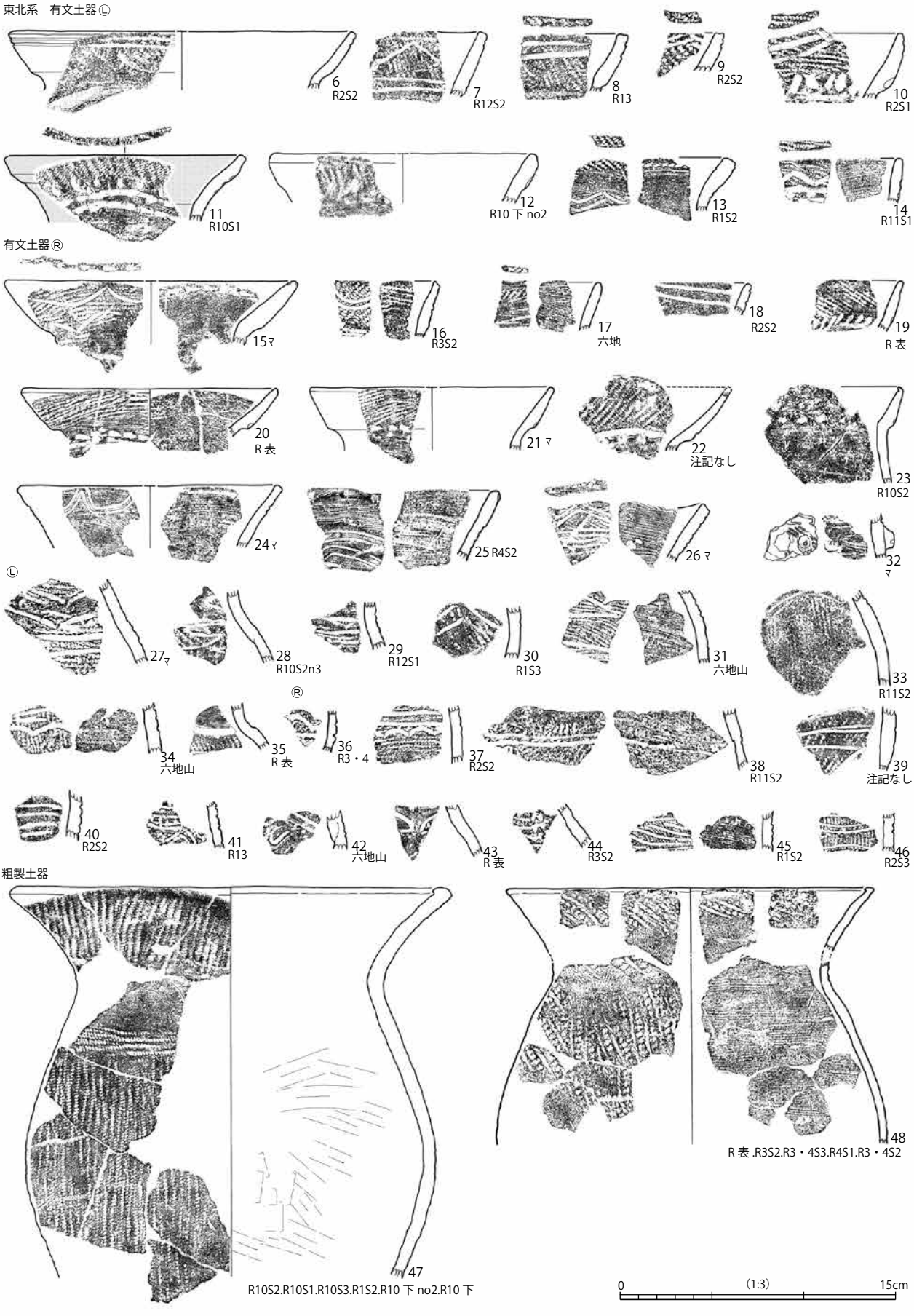

図 7　六地山遺跡遺物実測図（1956年発掘調査資料2）

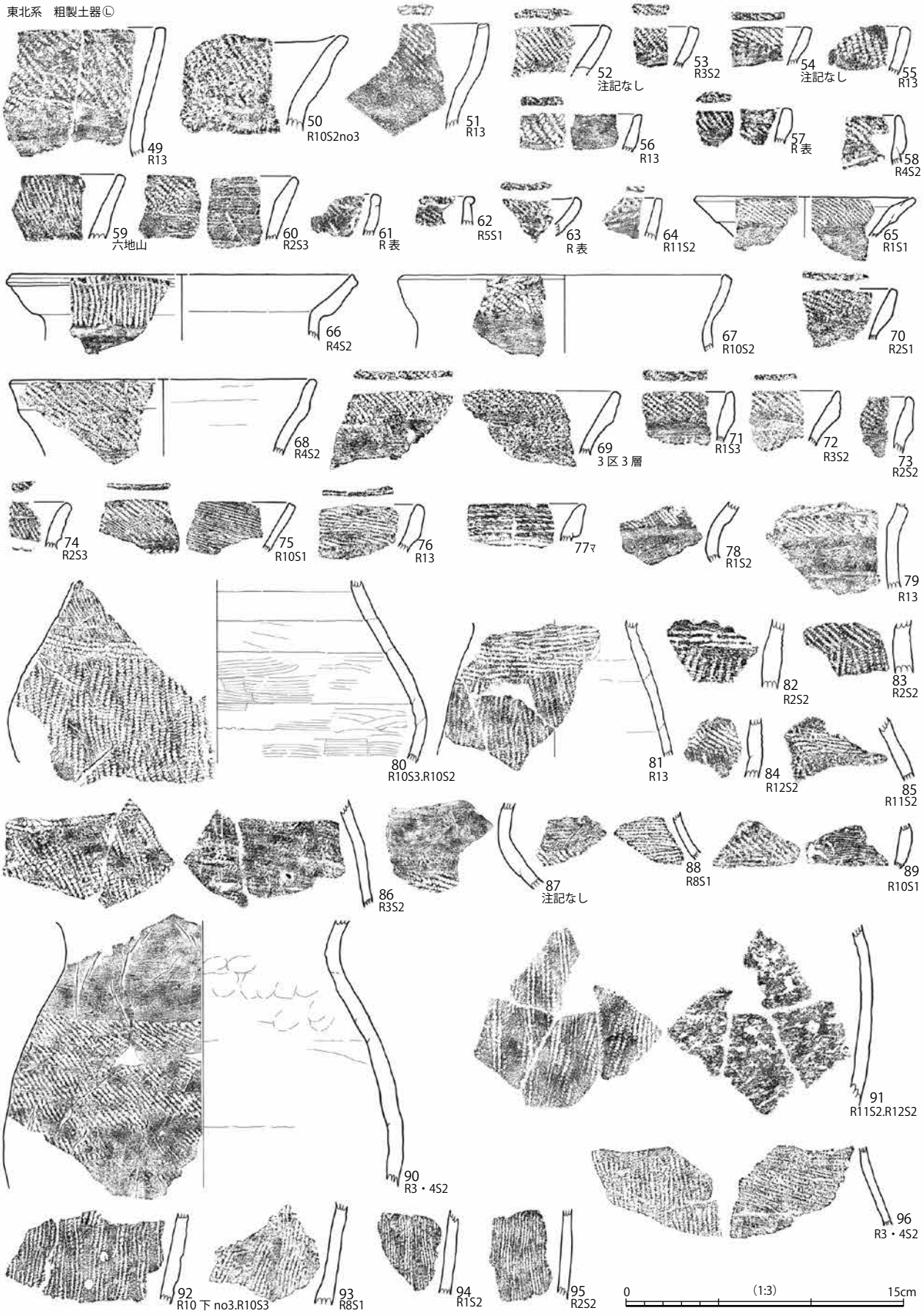

図 8　六地山遺跡遺物実測図（1956年発掘調査資料3）

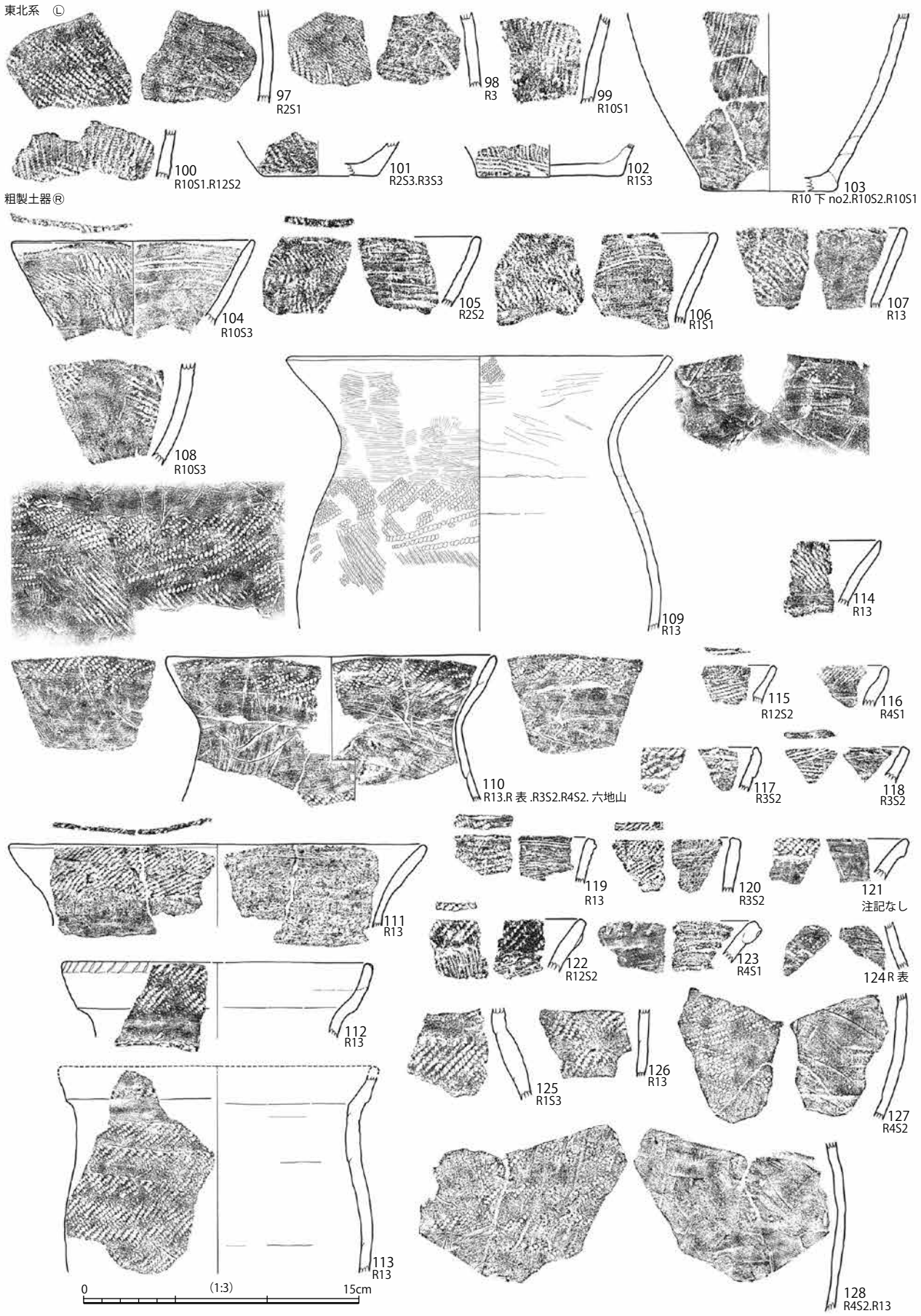

図 9　六地山遺跡遺物実測図（1956年発掘調査資料 4）

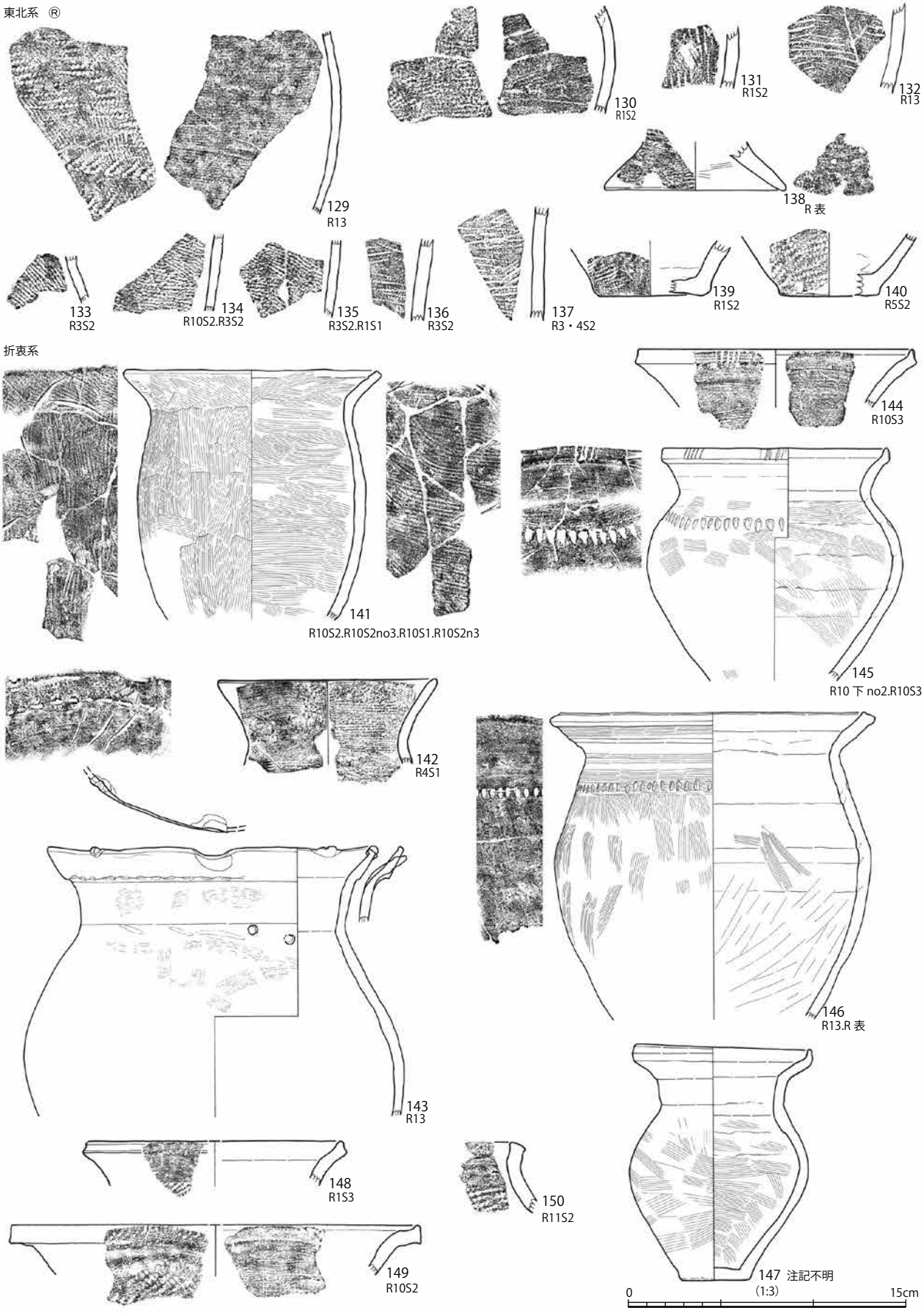

図10　六地山遺跡遺物実測図（1956年発掘調査資料5）

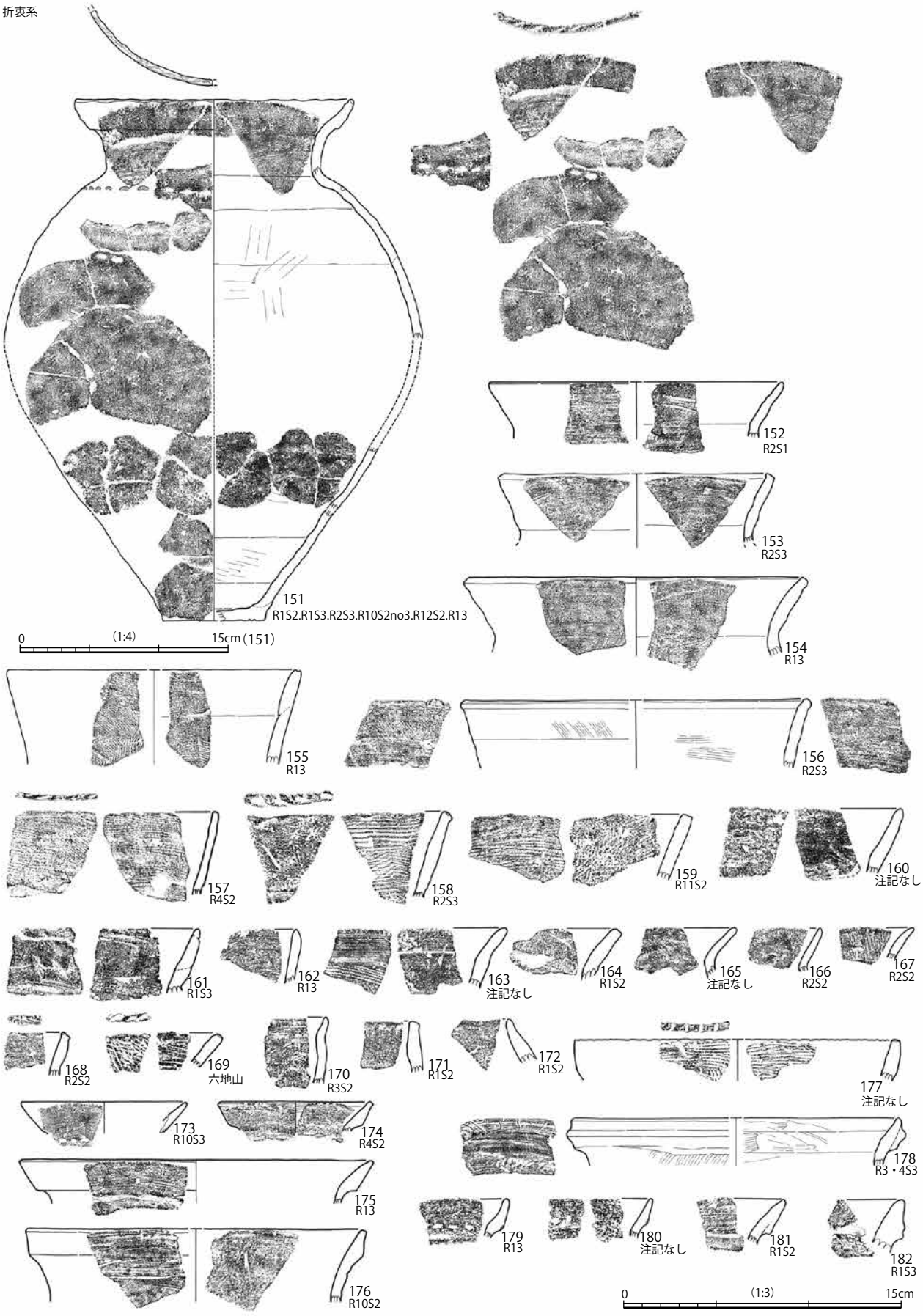

図11　六地山遺跡遺物実測図（1956年発掘調査資料6）

ザミを部分的に入れる例はないことから折衷系列とした。144・145は口縁端部をつまみ上げ、口縁部形態は後述するD北陸系列①いわゆる付加状口縁甕の口縁部形態に類似するが、有段部に４・５本の鋭い施文具で縦のキザミを部分的に入れている。146は口縁端部を内傾させるもので、体部中位に最大径を持つ例。後述するD北陸系列⑤頸部がくの字状に括れる甕とした239と器形が類似する。口縁部の横ナデが不明確であること、器面調整から本群とした。

148 ～ 150は口縁端部がナデにより面を持ち、形状は後述するD北陸系列⑤頸部がくの字状に括れる甕とした例の口縁部形態に類似する。いずれも、ＬＲ斜縄文を施文し、148・149はハケメと併用される。

口縁部が無段で肥厚しないもの（152 ～ 172）。調整はハケメ・ナデなどで一定ではない。端部にキザミ・刺突を入れるもの（157・158・168・169）、面を持つもの（153 ～ 156・159・164）などがあるが、小破片が多い。

口縁部が有段で肥厚するもの（173 ～ 182）であるが、様々なものを含んでいる。173・174は小形の壺であろう。173・179は口縁部下端に刺突列を入れる。

Ｃその他系列（図12-183～205）

系統が不明確なものを一括した。

①ハケ・櫛状施文具で直線文・刺突列点文を入れるもの（183～186・189～192）　183は内外面に粗い横位のハケメを入れた後、頸部に刺突列と５条程度の直線文を入れる。甕か広口壺。184は５～６条の波状文、185・186は体部上半に波状文を入れたもの。185は４条の直線文と波状文を入れる。186は２本描波状文で櫛ではない、在地的なものか。189は刺突列点文、190は肩部に６条程の直線文と刺突列点文を入れる甕で、内面ナデ調整。近江系として良い例であろう。

②２本描施文具で直線文・鋸歯文を入れるもの（187・188）　図６－２に近いものであろう。

③同心円文を入れるもの（193）　壺体部上半に幅の狭い沈線で同心円文を入れる。体部上半に同心円文を２重ないし３重に描き、その上には同心円文に沿って下向きの連弧文を２条入れる。内面調整に指頭押圧などが観察されるので、最上部で直径10cm未満の壺であろう。

④先端が２つに割れた幅広の施文具で、刺突列点文・波状文を入れるもの（194 ～ 200）　195 ～ 200は同一個体で、器種は広口壺か甕と推察される。色調が違うので194は同一個体であると断定できないが、施文具はよく似ている。同一個体ならばもう少し肩が張るのかもしれない。

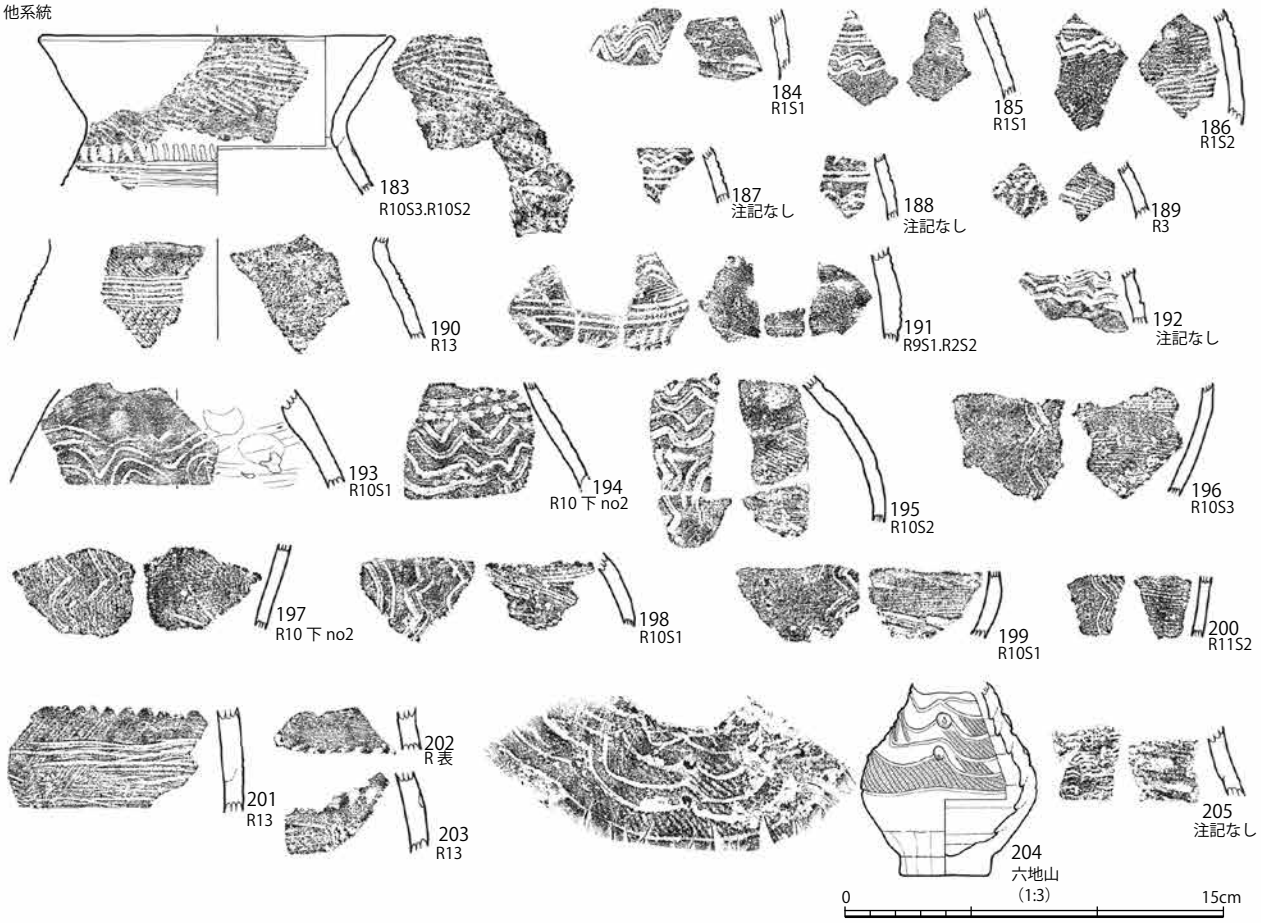

図12　六地山遺跡遺物実測図（1956年発掘調査資料7）

194・195は肩部には横位に波状文、肩部以下には縦位に波状文を入れる。波状文は弧線状で、上向き・下向きの連弧文を交互に入れているようにもみえる。縦位の波状文も弧線文の組み合わせのようにみえる部分がある。194は最上部に同じ施文具２本で横位の刺突列を入れる肩部破片。197・200は直線的な破片で体部下半の破片である。垂下する波状文は鋸歯文とみれば、青森県大石平遺跡・石動遺跡・富山県下老子笹川遺跡など天王山式以前にみることができる。

⑤その他（201 ～ 203） 同一個体で201は横位の条線上に横位に刺突列を入れる。202は破片下端に横位の刺突列があるもの。

⑥小形壺（204） 頸部から上を欠損するが、その他は完形の現存高７cm程の小形壺。体部最大径に横位の沈線文を入れ、その上半を文様帯とし、体部下半は無文としている。文様は崩れた上向きの連弧状の沈線を４単位に、４条程入れ、連弧文の頂点２か所に刺突のある円形浮文を貼付する。文様帯部分には沈線施文後に、無節Ｒを横位に充填する。細頸壺になりそうな器形、上向き弧線文や刺突のある浮文などから推察すると、施文具は異なるが､油田Ｙ期土器〔中村2011〕などに関係するものか。同様な小形土器は福島県和泉遺跡や能登遺跡にもみられるので当該期のものと考えられる。出土地区は不明。

⑦振幅の小さな多条の波状文を入れるもの（205） 箱清水式か。

Ｄ北陸系列（図13-206 ～図16-329）

甕（206 ～ 273）、壺（274 ～ 291）、高杯・器台（292 ～ 311）、底部（312 ～ 329）がある。

本遺跡の甕は口縁部下端及び有段部にヘラ・ハケによるキザミ・刺突列を入れるものが多いことが特徴として指摘できる。

甕（206 ～ 273）

①いわゆる付加状口縁甕（206 ～ 220・223） 206・207は口縁部が断面三角形で内傾し、擬凹線文・凹線文を入れる。共に再整理によって破片が接合し、口径の復元、体部内面の調整がわかるようになった。断面形態は207が208に比べシャープな作りになっている。207は体部内面を薄くケズリ調整するが、206は屈曲部まで、207はハケメの後にヘラケズリするが、屈曲部までは削らない。207は戸水Ｂ式、206は猫橋式に位置づけられる。208 ～ 211等も口縁部が断面三角形で内傾ないし直立する例。208・211・212は口縁部下端にヘラキザミを入れる。内面を削るものは206・207以外には少ない。Ｂ折衷系列とした144・145・148・149等の器形は近い。

②有段口縁甕（221・222・224 ～ 231） 有段部が無文のものよりもヘラ状施文具のキザミや刺突列を入れる例が多い。キザミにも様々な種類があり、Ｂ折衷系列に入れるべきものもあるかもしれないが、区別がつかない。

③有段口縁擬凹線甕（232 ～ 234） 外傾するもの（232・233）、直立気味に立ち上がるものがある（234）。232・233は端部を丸くおさめる。234は小破片で端部は欠損するが比較的厚みがある。232は胎土が精良なので、壺か器台の可能性もある。本遺跡の有段口縁甕で口縁部が伸長するものは少ない。

④いわゆる近江系受口状甕（235 ～ 238） 235・236は形態が237に似るのでここに入れたが、頸部がすぼまるので壺とすべきかもしれない。238は端部に面を持ち有段部下端にはキザミを入れ、内面は体部下半を削る。

⑤頸部がくの字状に括れる甕（239 ～ 264） 端部をつまみ上げ、①付加状口縁甕との区分が曖昧なものも含む。口縁端部が面取りされるものは、内傾するもの（239 ～ 245）、直立するもの（252 ～ 254）、その中間的なもの（246 ～ 251）がある。口縁端部が丸く面取りされていないものもあるが（251・255 ～ 262）、口径が小さいものが多い。

265 ～ 273は肩部のヘラキザミがある例で、施文具には様々なものがみられる。239の器形はＢ折衷系列146に類似する。

壺（274 ～ 291）

頸部がすぼまる器形を壺としたが、器形がわかるものが少ない。器形がわかるものとしては広口長頸壺（279・280）､広口短頸壺（278）がある。口縁部形態は有段口縁・無段口縁があるが、有段口縁が多い。278は内外面ミガキで赤彩された例。289は口縁有段部の内外面に櫛描波状文を入れ頸部に三角形突帯を付ける。櫛描波状文の原体は多条で細かい。281も頸部に突帯を付け、ヘラキザミを加える。290は肩部にヘラキザミを入れるが壺としては希少な例。Ｂ折衷系列とすべきかもしれない。291は有段二重口縁で内面にも段を持つ。器壁が厚く大形のもの。274 ～ 277は②有段口縁甕との分別が難しい。

高杯・器台等（292 ～ 311）

口縁部が有段で外傾する高杯（292 ～ 300）。有段部が強く外傾し伸びるようなものはみられない。

296の小形高杯は全形がうかがえる唯一の例。器高6.3cmのミニチュア土器である。杯部は有段で直線的に立ち上がり、棒状脚に無段の裾部が付く。端部は一か所のみ縦のキザミが８条程度付けられ、杯部の屈曲部、脚端部にもヘラキザミを入れている。さらに、杯有段部以外には縦ハケを残す稀有な例。縦のキザミはＢ折衷系列とした甕144・145と同じ手法なので、Ｂ折衷系列に区分すべきかもしれない。

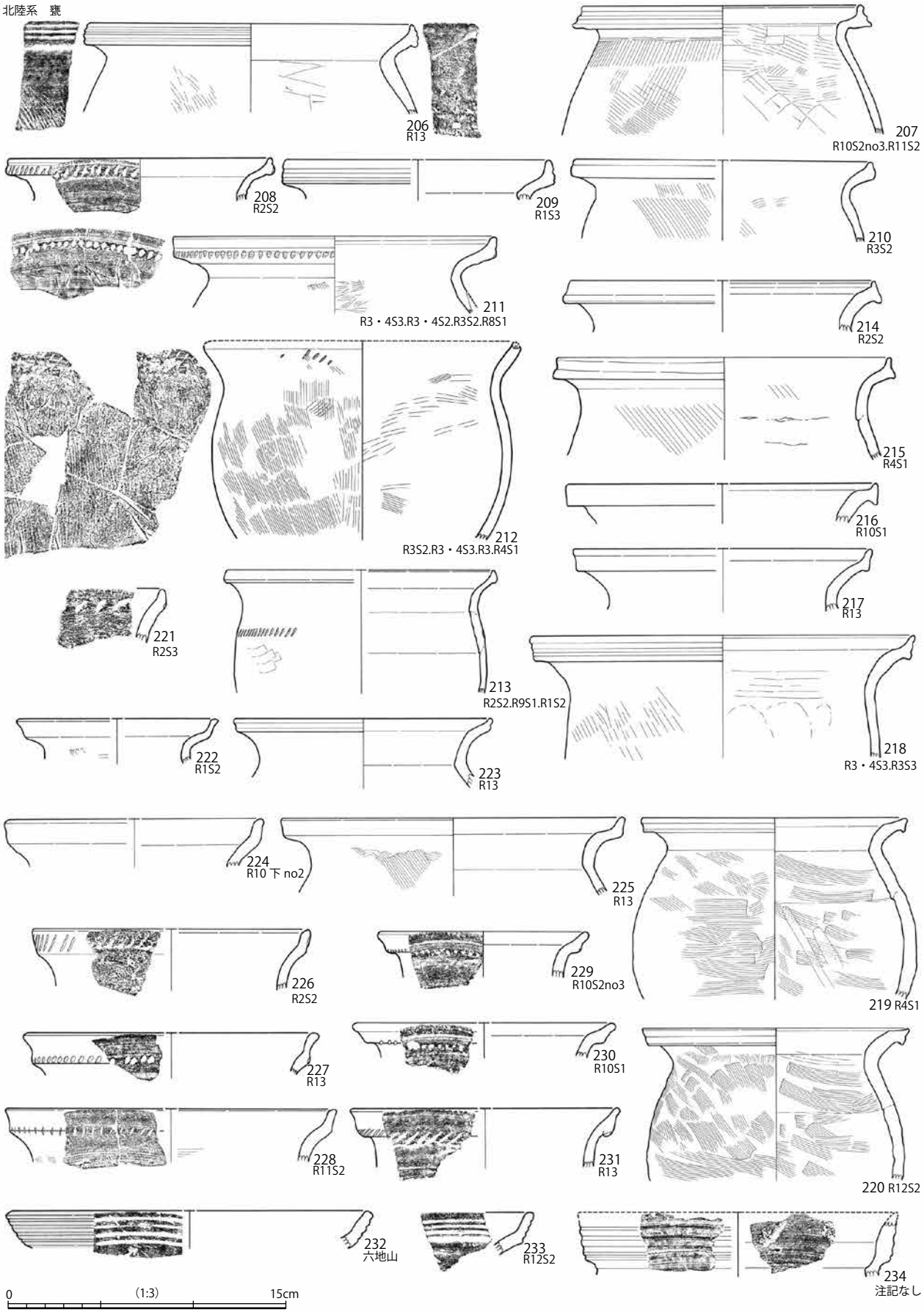

図13　六地山遺跡遺物実測図（1956年発掘調査資料8）

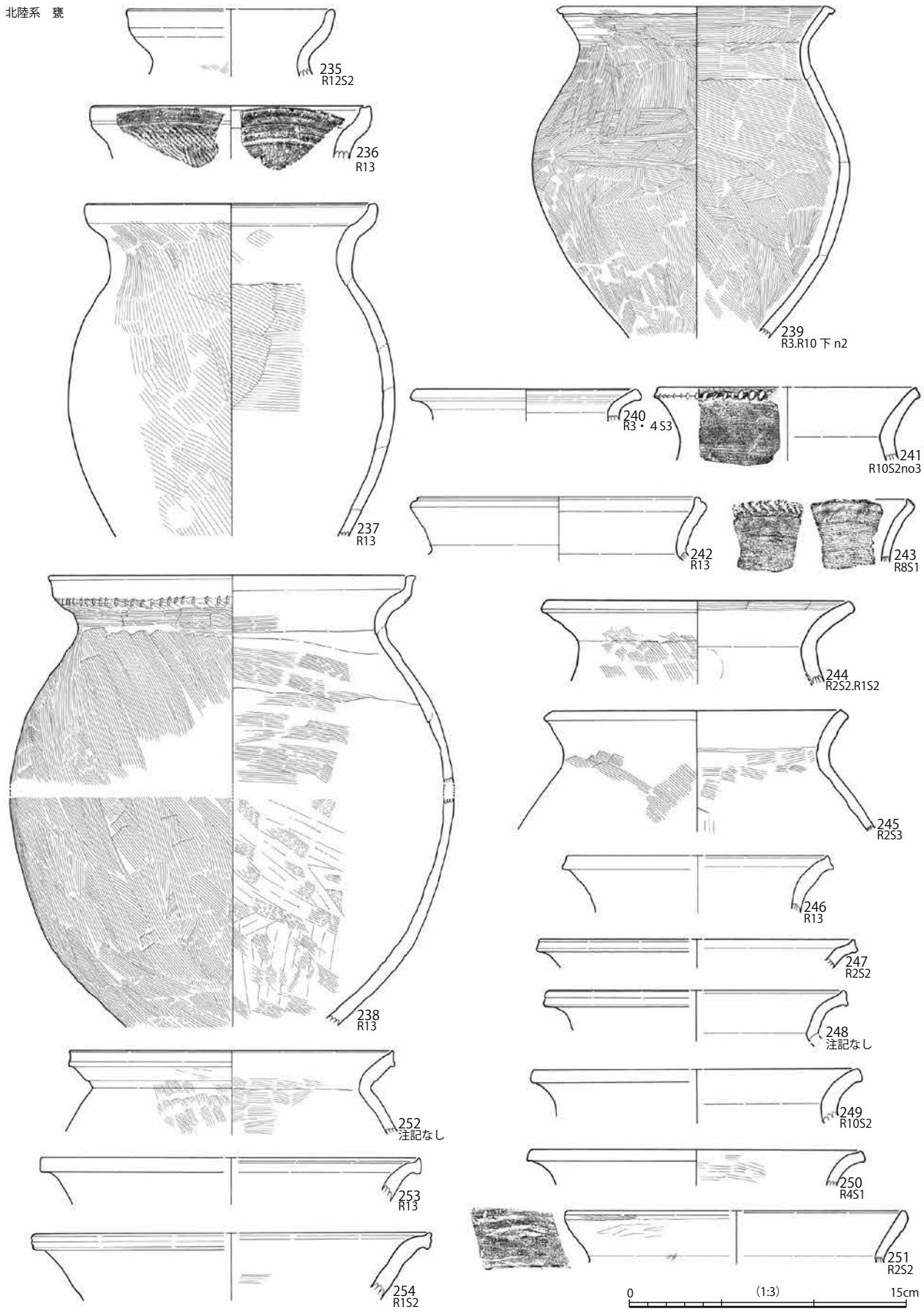

図14　六地山遺跡遺物実測図（1956年発掘調査資料9）

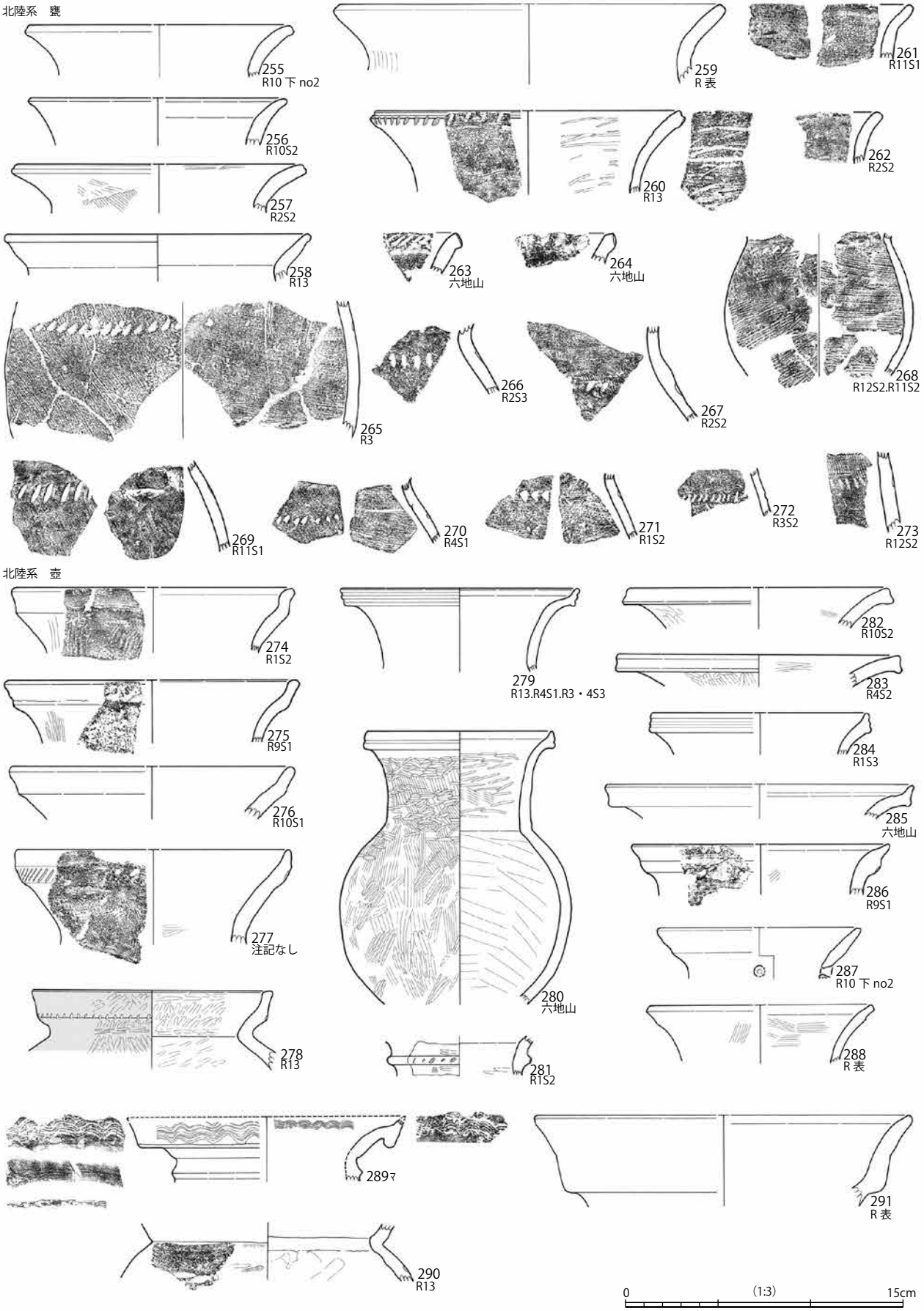

図15　六地山遺跡遺物実測図（1956年発掘調査資料10）

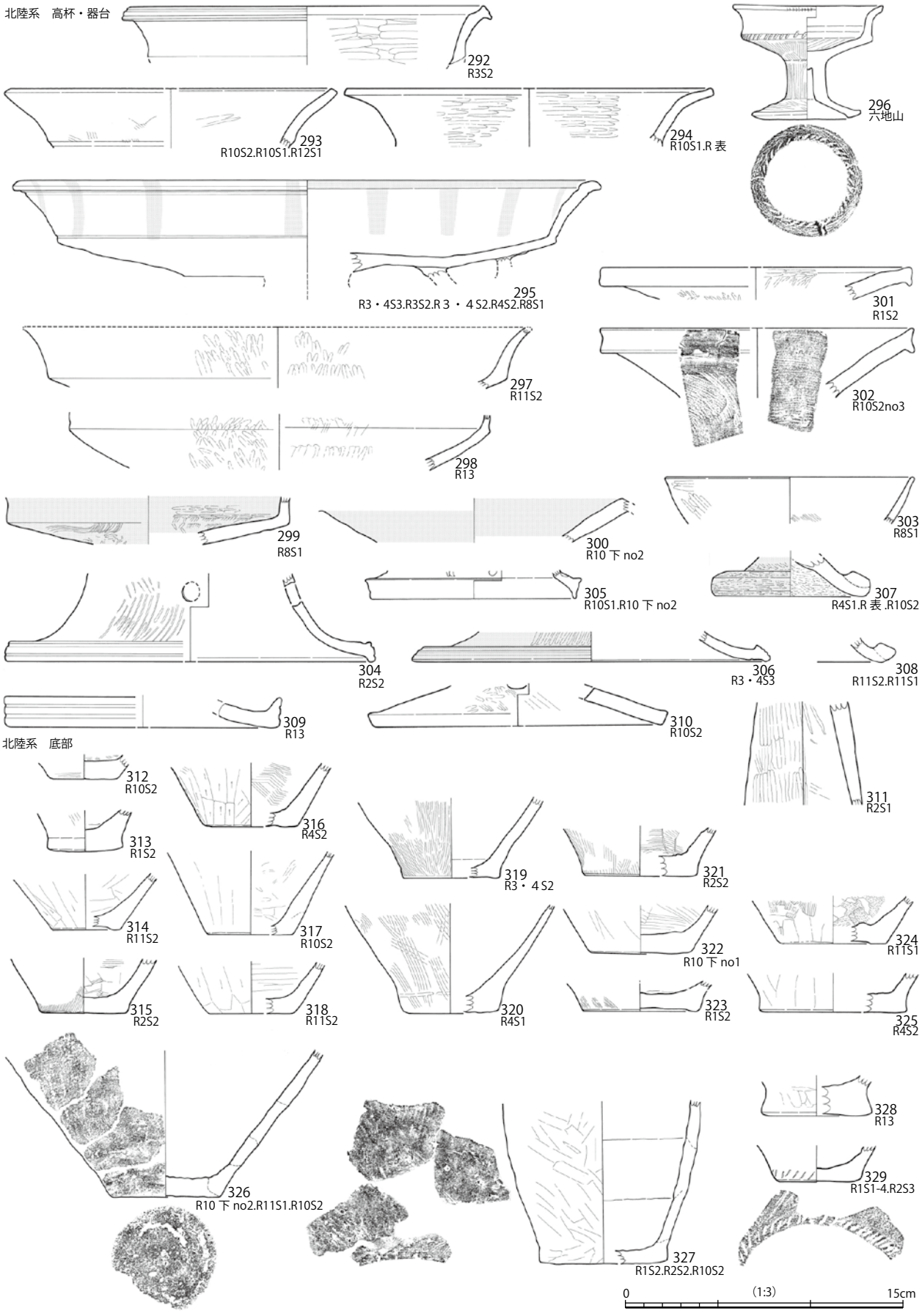

図16　六地山遺跡遺物実測図（1956年発掘調査資料11）

292 ～ 294も296に類似する形態で口径20cm未満の杯部、292は断面三角形の端部に擬凹線を入れる。299は内外面赤彩された高杯杯部で屈曲部が直立する例。屈曲部が外に張り出さないことから、石川県中能登町大槻３号墳出土高杯〔谷内尾1982〕に近い形態になろう。295は口径30cm以上の大形高杯で、杯部に環状把手の痕がある。また、杯部内外面に横帯・縦帯の赤彩がみられる。

受部が無段の器台（301・302）。302は外面にハケメを残す。310のような脚部が想定される。

裾部が有段の脚部（304 ～ 309）。304 ～ 306は器台、308は高杯脚部になろう。307は内外面ミガキで、外面を赤彩する小形で器壁の厚いもの。脚部内面を磨く事例は稀であるが、Ｂ折衷系列の可能性も考えて脚部とした。また、309は摩耗していて器面調整がわからない。脚部と考えて図示したが天地逆の可能性がある。311は棒状脚。303は杯部か鉢かわからない。1956年発掘調査資料には明確な有段口縁鉢や蓋はないようだ。

312 ～ 329は底部。312 ～ 325はＤ北陸系列、326・327・329はＢ折衷系列であろう。329は底部外周にヘラキザミを入れている。

Ｄ北陸系列とした土器群の編年的位置についてここでまとめておこう。本遺跡出土土器の特徴としては、田嶋編年の２－１期（法仏式）に位置づけられる古津八幡山遺跡SX1004〔渡邊2001〕のように口縁部が伸長するものはないと断言できる〔楠1996〕。時期的に２期以降に下る可能性があるものとして、擬凹線が入る234があるが、有段部の厚みがあるので２期以降に下げる必要はないと思われる。1956年発掘調査資料では壺形土器の291が唯一２期以降の可能性がある資料であろう。県内で１期の明確な資料としては糸魚川市後生山遺跡３号住居など少なく、下越では長岡市五千石遺跡などが知られるだけであるが、本資料を、従来の編年観でみると、田嶋氏の２期よりも古いＶ－２～３期（猫橋式）以前を主体とする時期と考えられる。県内では類例に乏しい時期であり比較することが難しいが、Ｖ－３期と考える古津八幡山遺跡第13次調査７ＴSD03Ｓ10〔渡邊2004〕と同時期か、それよりも古い戸水Ｂ式（207）も含むから、Ｖ－１期～Ｖ－３期を主体とする時期と考えておきたい。

（4） 上原甲子郎氏資料及びその他の資料

（図17-1 ～ 26）

『弥生式土器集成本編２』〔上原・磯崎1968〕と、概ね同じ上原氏提供資料を載せる『内野町誌』〔武田ほか1960〕、及び現在所在が不明の資料を掲載する『NKH』Vol.2-No.4〔中村1960〕から組み替えて転載した。Ａ東北系列（1 ～ 17・26）、Ｃその他系列（22 ～ 24）、Ｄ北陸系列（18 ～ 21）である。

Ａ東北系列の１～９はⓁ、10 ～ 11・14・15・16はⓇで、６・15は結節縄文、16は絡条体を施文する。結節縄文は発掘資料では希少な例である。12・13はハケメ地文か。発掘資料と比較すると有文精製土器が多いが選んで掲載したからであろう。３はＲＬの横走縄文・縦走縄文を地文に、２本沈線で上向きの連弧文を入れており、両者の

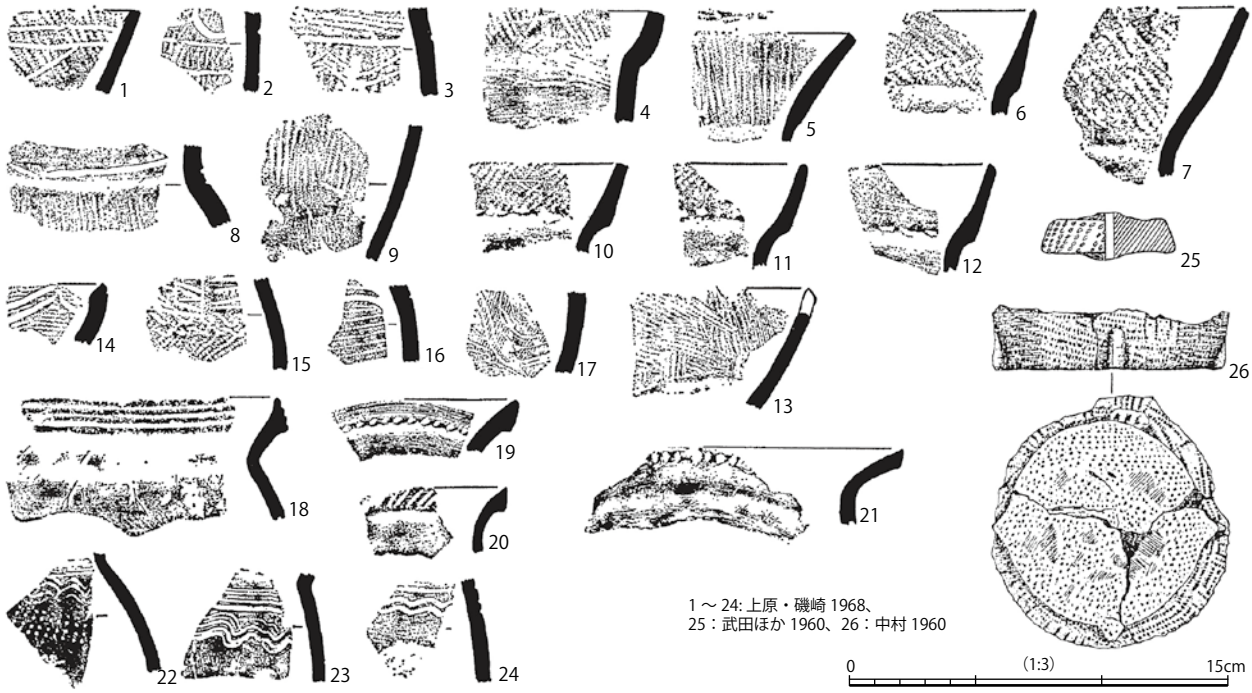

図17　六地山遺跡出土遺物（既報告資料）

同時性を示す重要な資料。口縁部を肥厚させる例も多く載せるが、４のように内湾するものから６・７のように長く伸びる例まである。ハケメ地文の12は肥厚部下端に横位の沈線を引き、縦のキザミを入れるもので、岩手県兎Ⅱ遺跡などに類例があるものであろう。ＬＲ縄文を入れる10も同じ技法か。13は内湾する口縁部で頂部にキザミを入れた突起を付ける。本遺跡では平縁が多く、波状口縁や突起を付ける例は少ない。図６－４や図10-143のような突起であろうか。縄文が施文されないのでＢ折衷系列とすべきかもしれない。

26は底部に４か所の突起を付けＲＬ縄文を施文するものであるが、現在所在がわからない。記載がなく推測の域を出ないが、垂下する沈線文が引かれ、底部に縄文が施文されているようにみえる。

Ｄ北陸系列の18はやや内傾する断面三角形の口縁部に３条の擬凹線文を入れている。図13-206と酷似するが、くびれの角度が異なるから別個体か。20・21のキザミ・刺突列はＢ折衷系列に分類すべきかもしれない。Ｃその他系列とした22は４条の櫛描直線文・波状文・刺突列点文、23は４条櫛描直線文・波状文を入れる例で、近江系の可能性がある。24は２本描波状文を入れ、その上に直線文を入れる例であるが在地化したものであろう。施文具は図12-185・186に近い。

25は土製紡錘車。横位に櫛状施文具による刺突列を入れた例と推察される。「土製品には紡錘車が二例あり、内一個には土器と同様の縄文が施してある」〔上原1954〕とした紡錘車に該当する可能もあるが、そうであればＲＬ縄文の縦位施文ということになる。

(5) 真島衛氏採集資料（図18-1 ～ 34）

「六地山　1960　8／２」と書かれた紙箱に入っており、ほぼ全ての土器片には朱墨で「六地山」と注記されている。1956年の発掘調査以前から表面採集に訪れていたと推察されるが、それらの資料は前述したように現在長岡市立科学博物館所蔵資料の「マ」と注記された資料が該当するのであろう。なお、真島氏資料中には石鏃等の石器は見つけられなかった。Ａ東北系列（１～16・19～29）、Ｂ折衷系列（32・33）、Ｃその他系列（17・18・34）、Ｄ北陸系列（30・31）である。

Ａ東北系列の１～５は沈線のある精製土器で５がⓇであるほかはⓁ。１は波状口縁、３・４は壺である。縄文のみの個体は６～19がⓁ、20～29がⓇである。21は口縁端部にのみＬＲを施文する。24・29は絡条体Ｒ、内面にも縄文を入れる25はＬＲ＋Ｒ附加条第２種である。Ｄ北陸系列の30・31は甕と壺。Ｂ折衷系列の32・33は口縁部の横ナデが不明瞭な例。Ｃその他系列の17・18は続縄文土器もしくはその模倣品、底部にＲＬ横走縄文を施文した19もその可能性がある。34は２本描施文具で弧線文とコンパス状の波状文を入れる。

真島氏資料は発掘調査資料と同様にⓁが多い。また、発掘調査資料と明らかに同一個体とわかるものがあり、25は図７-48、34は図12-195 ～ 200と同一個体と考えられる。

(6) 金塚友之亟氏採集資料（図19-1 ～ 30）

現在、新潟市歴史博物館が所蔵している資料である。「昭和28年から29年にかけて精密に六字山を踏査した」〔金塚1956〕と記載があるので、その頃に採集したものであろう。

Ａ東北系列（１～13・18～24）、Ｂ折衷系列（25～28）、Ｃその他系列（14～17・29・30）である。

Ａ東北系列の１～７は沈線文様のあるもので、１・２はⓁ、６・７はⓇ。７は２本描の細い沈線で上向きの連弧文を書いているがⅢ文様帯上端であろう。８～13（Ⓛ）・18～24（Ⓡ）は縄文のみのもの。Ⓛは縦走縄文が目立つが、11は節が細長いので０段多条の可能性がある。19・20は同一個体でハケメと絡条体Ｒを併用する。図７-47や48のような甕形になるものであろう。21は絡条体か附加条。23は結節があるもので本遺跡では希少例。

Ｂ折衷系列の25・26は内外面横ハケで口縁端部を平らにする。28は波状口縁の端部にヘラキザミを入れる例。

Ｃその他系列の14・15は続縄文土器で、14は幅２mm、15は幅1.5mmの沈線に沿ってＲＬ縄文を横走施文する。帯縄文は節が細かい０段多条で、縄文と沈線の切合い関係は沈線が後である。内面は黒色を呈し丁寧なヘラナデ。同一個体の可能性が高い。16・17も沈線に沿ってＲＬ縄文を施文しており模倣品と考えた。29は２本描波状文、30は肥厚する口縁部に鋸歯文を入れる。

金塚資料及び真島資料中に続縄文土器及びその可能性がある資料が確認された。隆帯を持たず、沈線に沿って縄文を施文する手法は「帯縄文系」後北Ｃ１式に相当しよう〔大坂・福田2005〕（注11）。本資料によって『ＮＫＨ』Vol.2-No.4〔中村1960〕で報告され、現在は所在が確認されない「底部破片ではあるが底部角に四箇（中１欠）の突起を附している。」土器（図17-26）も併せて評価をすることが可能になったと言える。端的に言えば、日本海を介して東北北部や北海道との流通をうかがうことができる直接資料として重要と考えられる。

(7) 1982年発掘調査資料（図20-1 ～ 47）

『六地山遺跡－1982年発掘調査を中心に－』〔甘粕・小野ほか1986〕から弥生土器を再実測した。Ａ東北系列（１～10）、Ｄ北陸系列（11～47）である。

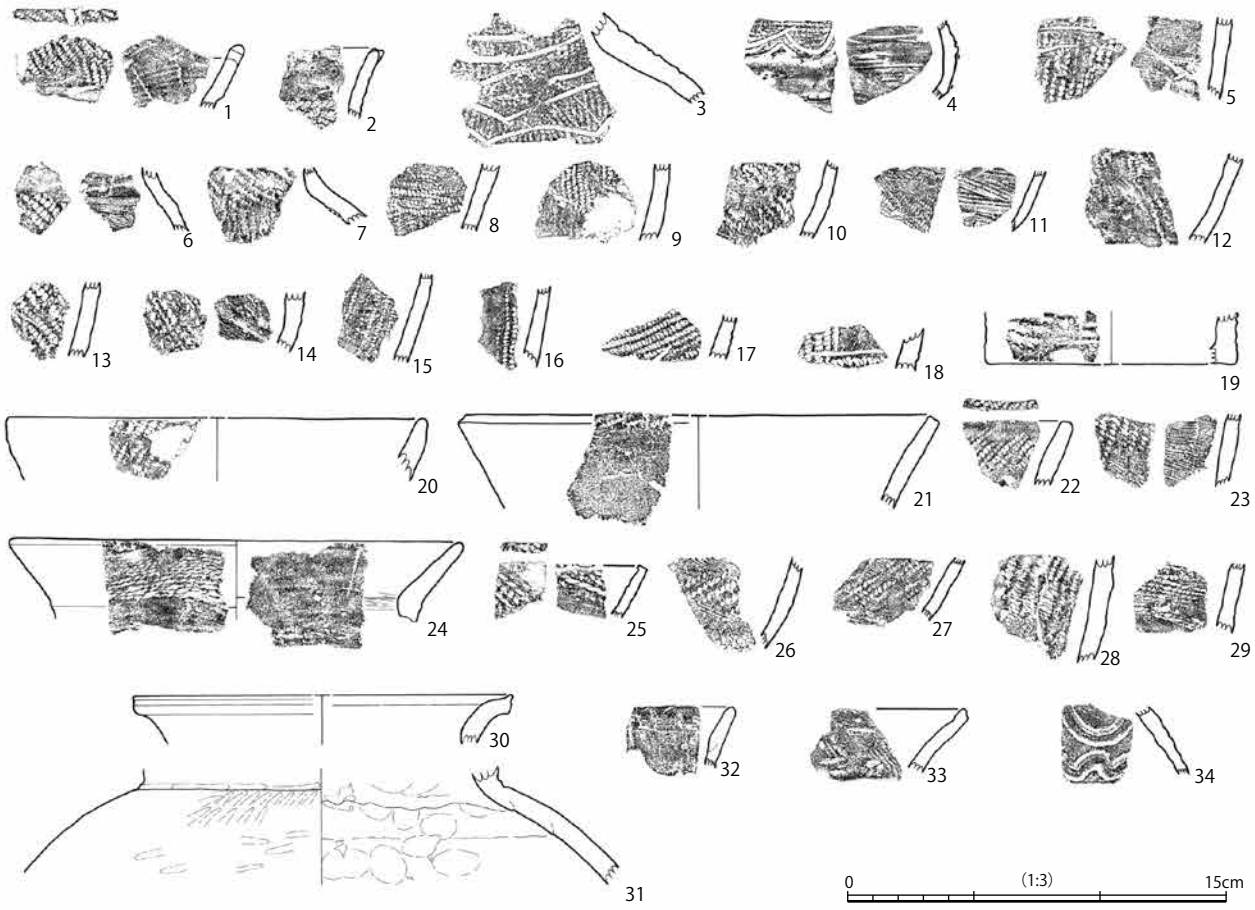

図18　六地山遺跡遺物実測図（真島衛氏採集資料）

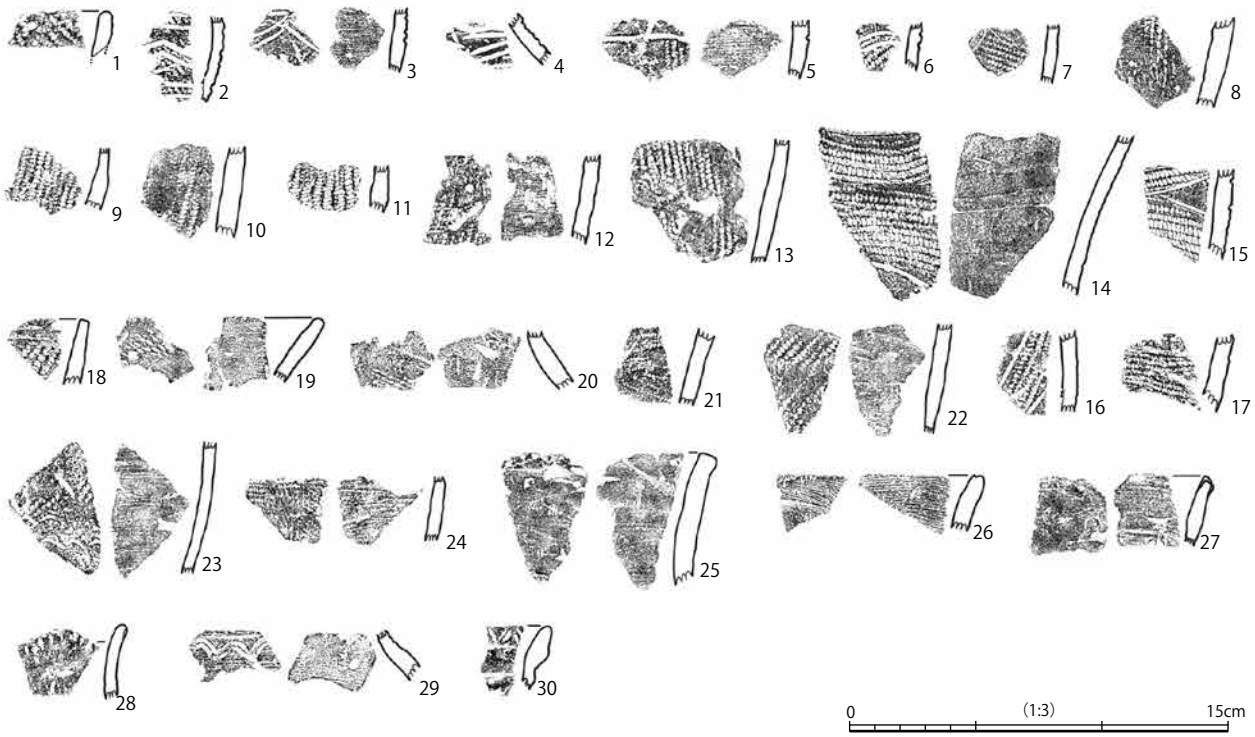

図19　六地山遺跡遺物実測図（金塚友之亟氏採集資料）

Ａ東北系列の１～３はⓁ、６～10はⓇで６は絡条体Ｒ、10はＬＲ横走縄文である。１は肥厚有段口縁部に上向き連弧文、４はハケメ地文に上向き連弧文、５は２本描施文具で平行沈線文と鋸歯文を入れる。図12-187・188に類似するものであろう。

Ｄ北陸系列の11～28・33～37は甕、29～32は壺、38～41は高杯・器台、42～47は底部である。23～26はくの字状口縁の甕。壺の29・30は口縁部にヘラキザミを入れる例。31は有段口縁、32は無頸壺である。

36・37の肩部のキザミは爪状・長いヘラ状施文具で、Ｄ北陸系列ではみないので、Ｂ折衷系列とすべきかもしれない。

⑻　2006年確認調査資料（図21-1～17）

調査地区は1956年発掘調査地点の東側で、概ね1984年発掘調査の１・２・３・４トレンチに囲まれた範囲である（図３）。確認調査により１～12トレンチの面積約222㎡から出土した。この区域は遺物包含層が残っていたことから現状保存の取り扱いとなった。出土遺物は、Ａ東北系列（１～７）、Ｃその他系列（８）、Ｄ北陸系列（９～17）がある。

Ａ東北系列の１はハケメ地文、２～６はⓁ、７はⓇである。１は肥厚した口縁部を外側へ伸長させる。口縁部は平坦ではなく緩やかな小波状を呈し、器形は図６-１と類似する甕もしくは広口壺になるものと思われる。外面の肥厚した有段部及び内面は横ハケ、頸部は縦ハケを地文とする。頸部の縦ハケは図23-1も同様。Ⅰ文様帯には幅４mm程の２本描施文具で上向き連弧文もしくは波状文、同じ施文具で文様帯下端には右上から左下に刺突列を入れている。Ⅱａ文様帯にも同一の施文具で上向き連弧文を描き、下端にはハの字状の交互刺突文を入れる。２は内湾する口縁部に縦走縄文を入れる例で、端部にも施文される。３は肩部に斜縄文を入れるもの。斜縄文の上には縄文施文後になで消された痕跡がみえる。４は０段多条、６は細い原体が使われている。

Ｃその他系列の８は２本描施文具で波状文を２条入れるが、上向き・下向きの崩れた連弧文を入れているようにもみえる。図12-194～200と類似する例。

Ｄ北陸系列の９は有段口縁甕で頸部が直立する例で、口縁部が強く内湾し、有段部下端を垂下させる。10はくの字状口縁の甕で端部に面を持つものである。11・12は壺。12は大形、11は内外面赤彩された小形のもの。13～15は高杯・器台である。15は赤彩される。16・17は底部である。

⑼　2007年確認調査資料（図22-1～6）

調査地区は1984年の１トレンチ北側の水田部分である。土地区画整理事業に伴う確認調査で水田下1.7～2.5ｍの黒褐色砂層から出土した。Ｄ北陸系列の２は有段口縁の広口長頸壺。３はくの字状口縁の甕で端部に面を持たないものである。５は無段の器台受部、６は有段口縁の鉢。内外面ハケメ調整でミガキ調整されないのは珍しい。

⑽　2014年確認調査資料（図23-1～19）

調査地区は1956年発掘調査地区の10ｍ程南側にあたる。文化財センター年報で既に報告済みの資料を再編した〔渡邊2016〕。Ａ東北系列（１～12）、Ｂ折衷系列（13・14）、Ｃその他系列（15）、Ｄ北陸系列（16～19）がある。

Ａ東北系列の１～10はⓁ、11・12はⓇである。２～７は同一個体と考えられる。９はハケメ地文にＲＬ、10は附加条もしくは１段で太さの違う縄を用いている。11は絡条体Ｒである。

１は広口壺か甕。口縁部Ⅰ文様帯は肥厚し、ＲＬ地文に２本単位の沈線で下向き連弧文、頸部Ⅱａ文様帯は縦ハケを地文とし、文様帯上端に上向き連弧文、下端は２本の沈線で下向き連弧文を入れる。内面は横ハケである。頸部の縦ハケはⅠ文様帯まで入れられていないので、調整ではなく、地文として入れられたものと考えられる。図21-１も同様であろう。２～７は口縁部を肥厚させず、幾分内湾させ、頸部を無文とする粗製土器。体部上半には斜縄文を入れる。図９-110・111のような甕形になろう。

Ｂ折衷系列とした13・14はヨコナデの不明瞭な例である。Ｃその他系列の15は先端の平らな原体で体部上半に２本描鋸歯文を入れた例で、図12-185・186と類似するもの。内外面の調整はナデ。Ｄ北陸系列の16は甕、18・19は底部、17は高杯か器台の脚部である。

⑾　まとめ

これまでに六地山遺跡で出土した土器について報告したが、弥生土器の系譜と時期を考える際に参考になるので、1956年の発掘調査で出土した剥片と、関係すると思われる小形土器について簡単に記しておきたい。

剥片（図25）　六地山遺跡では1956年の発掘調査で156点もの剥片が出土している。肉眼観察では石材は流紋岩もしくは頁岩と推察される。最も多く出土しているのは10区で、同じ調査区からは小形高杯も出土している。これらの剥片は弥生土器の出自を考える上で重要であると考え、管見ではあるが類似する事例を紹介しておきたい。

・新潟市秋葉区居村遺跡Ｄ地点〔渡邊・立木ほか2001〕　八幡山遺跡の隣接する丘陵上の遺跡。２基の土坑から弥生時代終末期の土器とともに23点の剥片等が出土した。石材は凝灰岩13点、珪質凝灰岩７点等。共伴した弥生土器

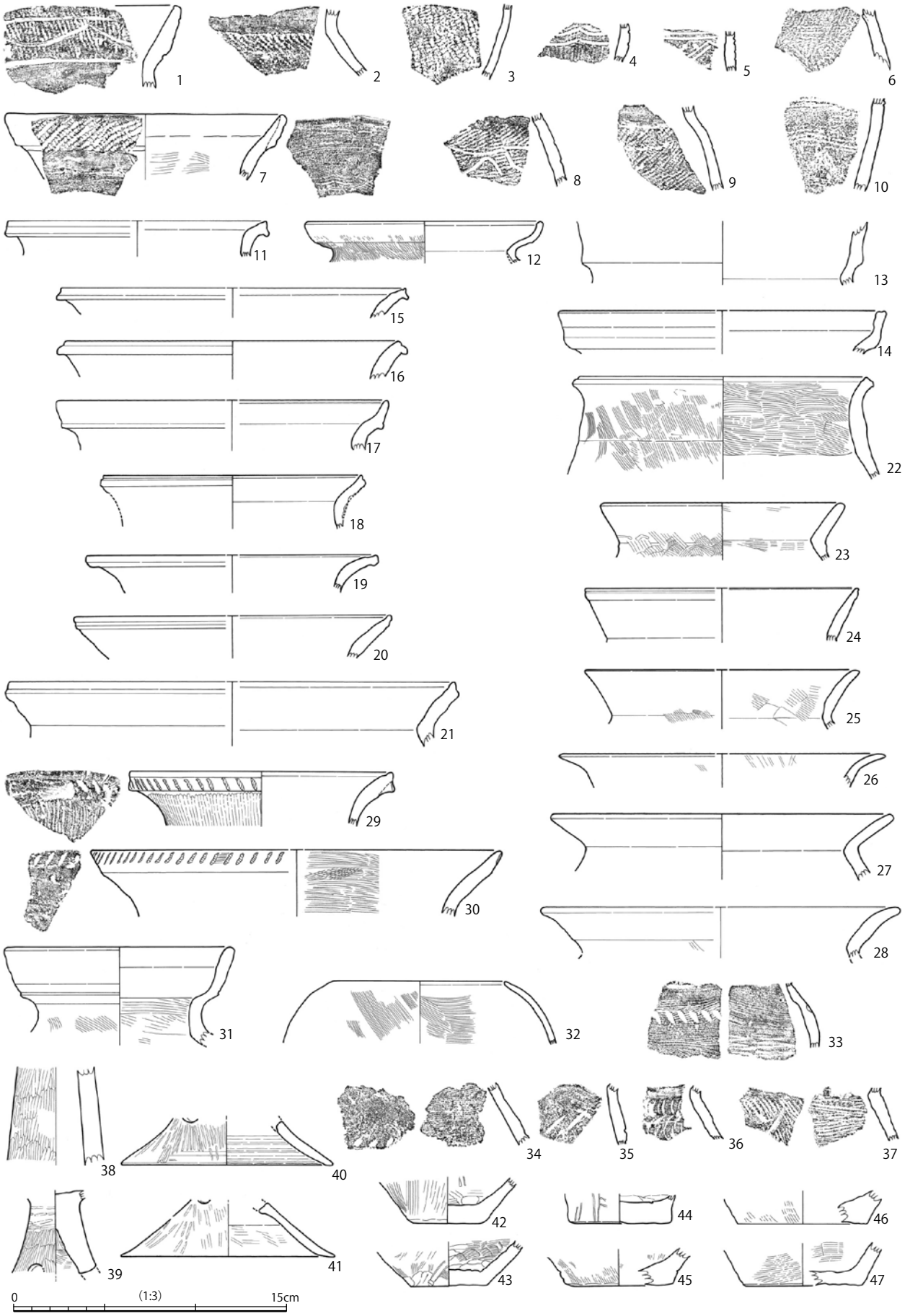

図20　六地山遺跡出土遺物（1982年発掘資料）

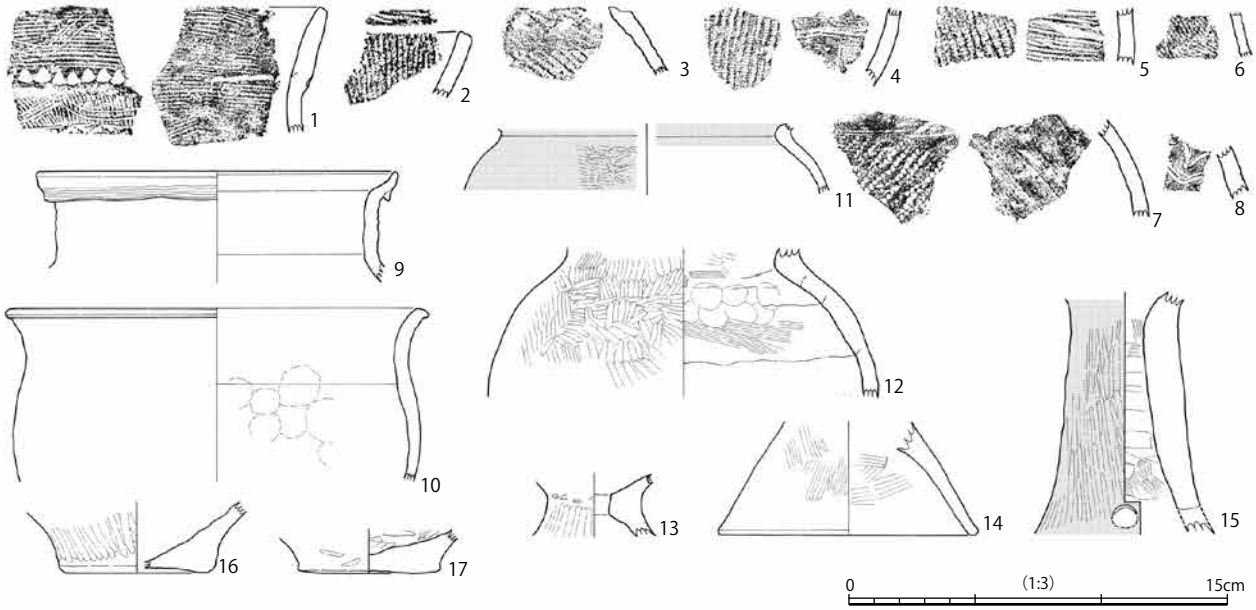

図21　六地山遺跡出土遺物（2006年度発掘資料）

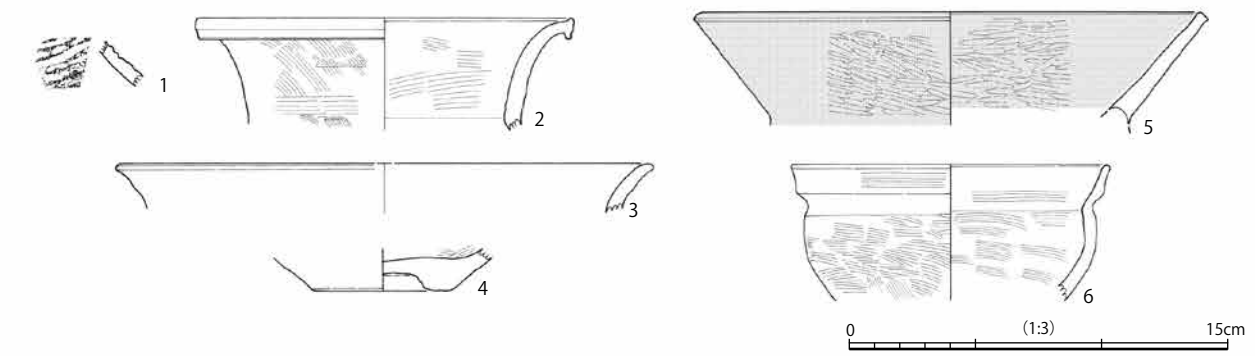

図22　六地山遺跡出土遺物（2007年度発掘資料）

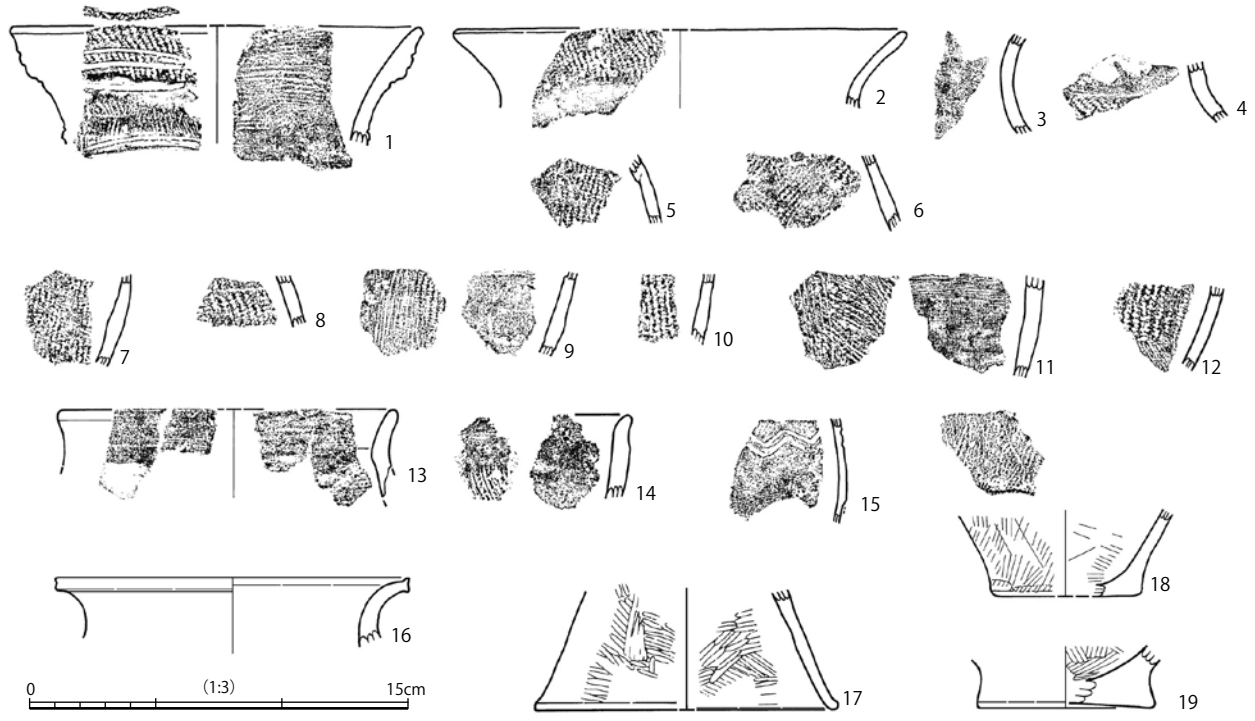

図23　六地山遺跡出土遺物（2014年度発掘資料）

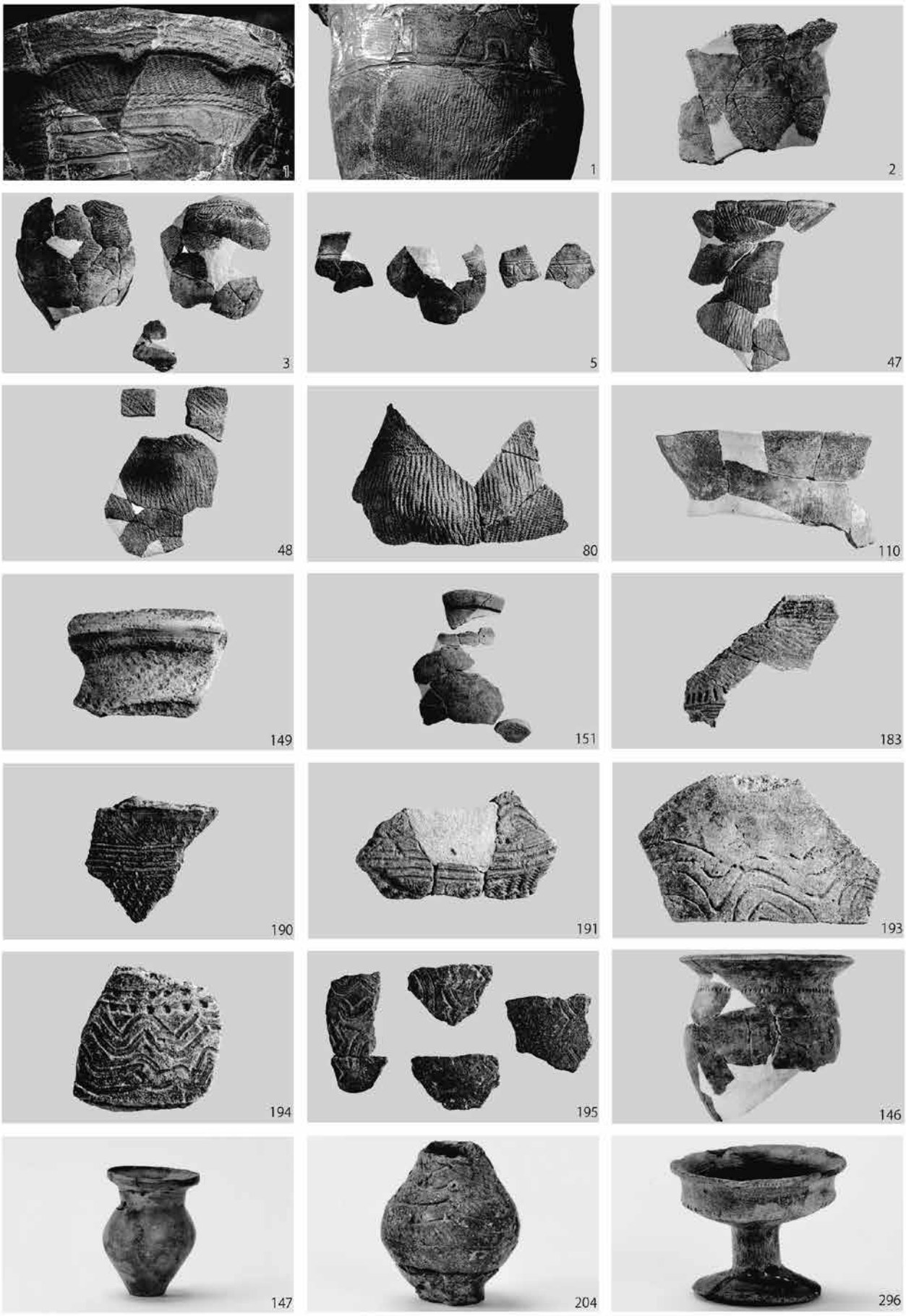

図24　六地山遺跡出土弥生土器写真（1956年発掘調査資料）

図25　六地山遺跡出土遺物写真（1:石器、2:剥片R10S2出土、3:鉄器･鉄滓）

はⓁ21点、Ⓡ３点で、横位羽状縄文、縦走縄文など新潟県内では希少な北方的な例が多い。

・新潟市西蒲区南赤坂遺跡〔前山・相田2002〕　上段テラス下土坑群から緑色凝灰岩製の剥片・チップが1,365点出土しているが、これらは玉造工程に関わるものと考えられている。遺跡からは古墳時代前期の土師器と後北Ｃ２－Ｄ式が定量出土しているが、玉造に関わったのは地元集団と考えられている。

・青森県むつ市外崎沢（１）遺跡〔高橋・葛西1979〕　埋まりきらない竪穴住居に弥生土器の破片とともに「割石」354点が廃棄されていた。63％が瑪瑙で「石そのものが割られること事態に石器としての用をなしていたものと考えられる。」とされている。弥生土器は中期終末の念仏間式から後期初頭にかけてのもの。

・青森県東津軽郡外ヶ浜町宇鉄Ⅱ遺跡〔岩本ほか1979〕　中期併行の弥生土器（宇鉄Ⅱ式・田舎館式）・恵山式とともに、頁岩598、瑪瑙153、黒曜石12、その他14、合計777点の剥片が出土している。15－21Ｇでは瑪瑙の剥片51点がまとまって出土している。土坑墓かと推察される土坑も20基弱検出されているが、土坑内ではなく包含層出土が多い。

・北海道せたな町瀬棚南川遺跡〔高橋ほか1976〕　墓坑と認識される土坑等の遺構から、剥片・削片558点が出土している。恵山式に伴っており続縄文期に属する。18号墓壙のように石鏃が36本も出土している土坑もある。

・岩手県滝沢市大石渡Ⅴ遺跡〔井上ほか2008〕　東向き緩斜面の約45ｍの範囲にある焼土41基や周辺から後北Ｃ２-Ｄ式・塩釜式・赤穴式土器と共に黒曜石製ラウンドスクレーパー７点、剥片146点などが出土している。

小形土器　六地山遺跡では図７-35、図11-173・174、図12-204等の小形土器が出土している。器種は壺と高杯で多系統のものである。新潟県内では六地山遺跡よりは時期的に古いが中期後半の阿賀野市狐塚遺跡で土坑から多系統の小形土器が多数出土している〔佐藤ほか2009〕。土坑は墓坑と考えられる。また、村上市道端遺跡でも土坑から小形壺が出土している〔前川ほか2006〕。その他、岩手県二戸郡一戸町上野Ｂ遺跡〔高田1984〕、福島県会津若松市和泉遺跡〔木本ほか1991〕などに類例がある。前者は中期終末、後者は後期前葉である。

六地山遺跡の場合も小形土器や剥片は土坑・墓坑に伴った可能性を考慮する必要があるように思われる。まとまって剥片の出土する事例は東北北部や北海道で多いようだ。採集資料であるが、多量の石鏃等も墓地と関係している可能性がある。

六地山式土器の編年的位置　ハケメ調整を主とする一群と縄文を主体とする一群が時期的に同じなのか別なのかが問題とされてきたが、〔新潟市1994〕では、出土状態から明確に分離できないこと、両群で共通する形態の甕（図10-149・150）が存在すること、同じ胎土のものが存在することを理由に両者を同時期とし、〔中村1983〕・〔坂井1985〕を引用し、後期前半から中頃としている。しかし、天王山式との編年的な前後関係についての記述はなかった。

それでは次に、弥生時代の研究者が「六地山式土器」をどのように考えていたのかみてみよう。まず、「天王山式土器」との比較を行おう。

天王山式土器の特徴は石川日出志氏によって次のよう

にまとめられている〔石川1990〕。まず山内清男氏によって、①口縁部突起の発達、②交互の刺突、③縦走する縄文が指摘された。そして、中村五郎氏によって、④体部文様帯下端の下向き弧線文・連弧文、⑤横走する縄文、⑥ＲＬ縄文が多い、⑦文様帯下端の鋸歯文（④の一部）、⑧底部への施文、⑨片口の存在、⑩半球形の口縁部、⑪口縁部の連弧文、⑫無文の頸部、⑬壺胴部の同心円文・渦巻文が追加され、さらに、佐藤信行氏によって⑭体部文様帯の磨消縄文の発達も特徴の一つとされた。

この「天王山式」の特徴を六地山遺跡でみてみよう。存否多寡を記すと以下のようになる。①あるが少ない、②ない、③多い、④あるが少ない、⑤あるが少ない、⑥多い、⑦あるが少ない、⑧ほぼない、⑨ある、⑩ある、⑪多いが文様帯として確立されているかは疑問、⑫同心円文はあるが（193）、系統が異なる、⑬あるが少ない。

「天王山式」の最大の特徴とされる交互の刺突（交互刺突文）がなく、その他の特徴も「天王山式」と異なることは明らかである。一方で、縦走縄文が多いことは六地山遺跡でも特徴として上げることができる。

次に、六地山遺跡出土の弥生土器が、研究史上どのように扱われてきたか簡単にみておきたい。

まず、山内清男氏が「宮城県の崎山囲式、福島県の天王山式等は弥生式の後期と考えられている。なお、新潟県、富山県、石川県の弥生式のある種のものに伴って同様の縦の縄文が少数伴出し、全く異物の如き感を与えている。これらは北方系の特徴として考慮する必要がある。」〔山内1964〕（注12）とし、遺跡名を限定してないがＲＬ縦走縄文に着目したことを重要視しておきたい。この記述は新潟県内では六地山遺跡や砂山遺跡を念頭においた記述と考えられる。

次に、天王山式土器に関して多くの論考がある中村五郎氏が六地山遺跡について言及されている部分を要約しておこう。中村氏は、〔中村1983〕で、山草荷２式→下谷地→砂山（天王山式）→六地山式とし、六地山式を天王山式の次に位置づけ、編年表では福島県の踏瀬大山と併行させている。また、畿内第Ⅴ様式の壺形土器Ａに近似する壺、杯部の口縁や立ち上がりが直立にちかい高杯を含む六地山式を西ノ辻Ⅰ式との関係から畿内第Ⅴ様式でも古い段階とする。六地山遺跡資料の中に交互刺突文がないことから天王山式よりも新しいと位置づけ、東北系・北陸系土器を同一時期のものとして、編年的位置を決めた。六地山遺跡を畿内第Ⅴ様式古段階に位置づけたことは、それ以前とする狭義の天王山式土器（天王山遺跡の天王山式）をⅣ様式併行とする根拠の一つとなった。中村氏は1989年にあった「天王山式期をめぐっての検討会」でも同様の発言をしている〔弥生時代研究会編1990〕（注13）。

その後、中村氏は新資料の増加によって、中期後半から天王山式期にかけての編年を細分し、福島県会津美里町油田遺跡出土資料から油田Ｙ期を設定し、御山村下期→油田Ｙ期→天王山式とした〔中村2009・2010・2011〕。油田Ｙ期土器は、２本組の平行沈線で文様を描くことが特徴であるとし、新発田市王子山遺跡で２本１組の施文具による沈線が多く、磨消縄文技法がないことから、油田Ｙ期から天王山式土器への過渡的特色としている。また富山県頭川遺跡にも２本１組の沈線が一定量あるとしている。そして、「福島県でも踏瀬大山式土器は天王山式土器から大きく後退し、ぎゃくに新採用器種のめざましい進出がある。天王山型式群から福島県内では踏瀬大山式、新潟県内では六地山式が離脱した」〔中村2010〕とし、従来同様に天王山式→六地山式との編年観を示している。天王山遺跡中期説の根拠の一つとしている開津台畑遺跡についての言及はなかった。模式的に記すと下記のようになろう。

天王山式型式群

御山村下期 → 油田Ｙ期 → 天王山式 → 踏瀬大山式
　　王子山遺跡　　六地山式
　　頭川遺跡
　　西ノ辻Ⅰ式
　　Ⅳ様式末　第Ⅴ様式初頭

次に石川日出志氏である。氏は六地山遺跡の天王山式系土器には確実な交互刺突文は１例もなく、縄文側面押圧がみられること、口縁部のⅠ文様帯は下端の区画さえない縄文のみの例が多く、頸部文様帯も簡略化しており、「屋敷段階かそれ以降のものが中心になるように思われる。」とし、中村氏同様に狭義の天王山式よりも新しく位置づけた〔石川1990・2000〕。そして、多量にある北陸系土器については、中村氏や坂井秀弥氏が指摘するように〔坂井1985〕、Ⅴ期前半が主体だが、法仏段階まで下る資料も少数みられるということを根拠に、法仏期の土器にこそ伴うのではないか考えた。天王山式を後期初頭（前半）とする石川氏にとって、天王山式よりも新しく位置づける六地山遺跡の天王山式系土器に後期初頭（前半）の北陸系土器が共伴することは考えられなかったのであろう。しかし、石川氏が法仏Ⅰ式に近接する甕とした〔石川1990〕、〔寺村1960〕の図４-41は、本報告の図13-206であり、この甕は現在では猫橋式に位置づけられると考えられるので、石川氏のこの説明には問題があると言わざるを得ない。それと縄文原体側面押圧を新し

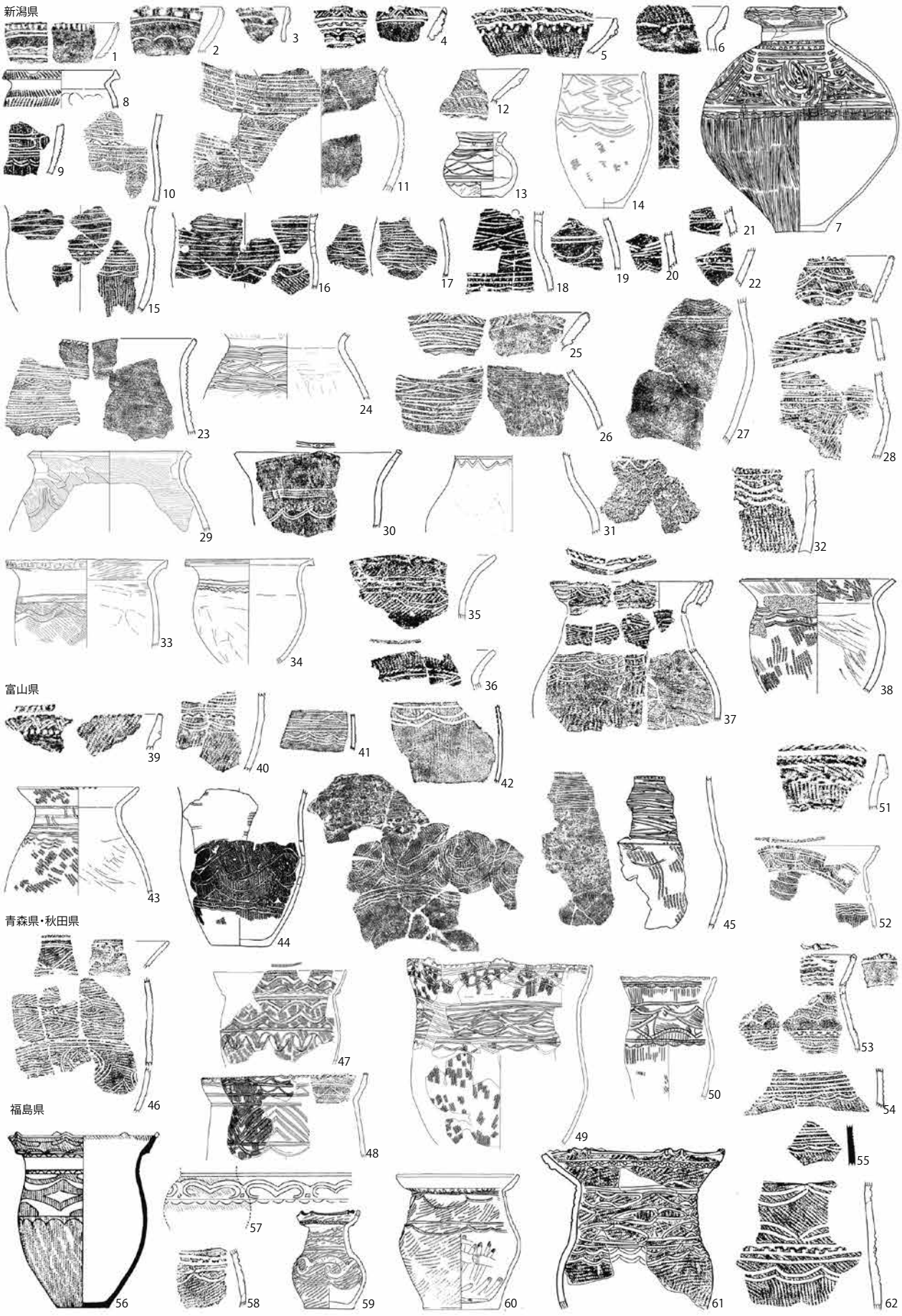

図26　六地山遺跡に関係する土器（Ⅰ文様帯の下向き連弧文、Ⅲ文様帯の上向き連弧文、折衷土器等　縮尺不同）

いと決めつけたことに問題があった。

石川氏と中村氏はともに六地山遺跡の天王山式系土器を狭義の天王山式よりも新しく位置づける点では一致するが、北陸系土器を共伴とみなすか、みなさないかという点で大きな見解の相違があった。いずれにせよ、六地山遺跡の中に交互刺突文がないことが、天王山式よりも新しく考える根拠になったことは間違いないであろう。

筆者は古津八幡山遺跡出土土器を５期に区分する中で、六地山遺跡の一部を１期新段階に位置づけ、編年表では「六地山の一部」を天王山遺跡天王山式よりも１段階新しい段階とした〔渡邊2001〕。そして、注では「発掘調査資料は八幡山１期･２期に限定されると考えている。猫橋式と、北陸系の器形に縄文を施文した折衷土器が出土しており、両者の並行関係を示している。」と説明した。中村氏や石川氏同様に天王山遺跡天王山式よりも新しいと考えながら、一緒に出土している北陸系土器、そして後期前半の北陸系土器の器形に縄文を施文した砂山遺跡や六地山遺跡の折衷土器の成因に苦慮した。石川氏が言うように東北系と北陸系土器が別時期なら、これらの折衷土器が作られるに至った理由が説明できなかったのである。編年表の「六地山の一部」は北陸系土器とこの折衷土器を想定してのことであり、大半の東北系土器の位置づけは留保せざるを得なかった（注14)。

野田豊文氏も六地山遺跡の天王山式系土器を法仏式・月影式に併行する３期（滝ノ前２・３群）に位置づけている〔野田2005・2009〕。

一方、鈴木正博氏は石川日出志氏が「プロト天王山式」を「天王山式」と区別していないことを批判し、松影Ａ遺跡の編年も逆転しているとし、「中村五郎の指摘を受け、新潟市六地山遺蹟の図示土器群を「天王山式に後続する土器」と断言するが、「文様帯変遷論」の立場から指摘すれば順序が逆であり、「天王山式」の典型的な文様帯より古式であることは言を俟たない。」〔鈴木2014ａ〕とし、「天王山式」に至るプロト段階として天王山式→六地山式を順序が逆としている。そして、２つの論文〔鈴木2014ａ･ｂ〕に掲載された編年を纏めると表４のようになろう。

松影Ａ遺跡の報告書では、石川氏の指導を受けて、同遺跡の土器群は天王山式に後続する位置とされ〔加藤ほか2001〕、新潟県内ではそれが「定説」になっていった。佐藤信行氏・相原淳一氏・相澤清利氏らが兎Ⅱ遺跡など古手の天王山式土器に伴う平行沈線文系土器（２本描施文の土器）があることを指摘していたのに、なぜか新潟県内では忘却されていた。太平洋側の桜井式や十三塚式のことなので、日本海側の新潟では関係ないと思われていたのだろうか。会津で油田Ｙ期土器が注目されたことによって、新潟でもようやく見直しの機運になって来たと言えよう。

表４　鈴木正博氏の編年（〔鈴木2014ａ･ｂ〕をもとに作成）

対象地域など	中期終末	後期初頭～後期前葉の「プロト天王山式」
砂山遺跡	「砂山Ｃ４段階」	「砂山Ｋ１式」 → 「砂山Ｋ２式」 → 「砂山Ｋ３式」
新潟県日本海沿岸	「松ノ脇式」	「浜端式」 → 「六地山式」 → 「松ノ脇Ｋ式」
阿賀野川・阿賀川	「狐塚式」	「和泉式」 → 「松影Ａ式」 → 「能登式」
油田遺跡	「油田ＹＣ式」	「油田ＹＫ式」 → （油田Ｙ期） → （＋）

今回、六地山遺跡の再整理にあたり、鈴木正博氏の論文から受けた影響は大きい。甕と壺を同列に分類する砂山式の細別は理解できないが、天王山式と六地山式の編年を逆転させるとする説には賛同する。そうすることによって、様々なことが解決する様に思える。また、天王山遺跡天王山式以前、鈴木氏の言う「プロト天王山式」を認定する重要性に改めて気付かされた。

前述したように、本遺跡のＡ東北系列中で天王山式土器の特徴として挙げられた14項目のうち、明確に該当するものは③縦走縄文だけで、他は明確ではない。14項目にない特徴として、ⓐⅠ文様帯の下向きの連弧文や弧線文、ⓑⅢ文様帯の上向き連弧文、ⓒ必ずしも同時施文とは限らないが、２本描や３本描の沈線文で文様を描くこと、ⓓ縄文原体の側面押圧があるという４項目を指摘できる。図26は上記特徴に関係する資料を順不同で並べた図である。

ⓐⅠ文様帯の下向きの連弧文や弧線文（１～７・12・28・39・51・56)、ⓑⅢ文様帯の上向き連弧文（７・９～11・13～24・26～33・35・37・38・40～45・47～50・52～55・57～62）である。ⓐ天王山式のⅠ文様帯の連弧文・弧線文は原則として上向きで、下向きは希少。図示した例をみるとわかるように、弧線文の交点に刺突を入れ、Ⓛ縄文を用いる共通性がある。51は口縁端部に突起を挟んで方向を変えるハの字状キザミを入れ、Ⅰ文様帯の肥厚有段部下端を下向き弧線状に押圧し、その交点に刺突、ＲＬ斜縄文と側面押圧を入れる。Ⅱａ文様帯には縦走縄文を入れ、下端に下向き連弧文とハの字状の交互刺突文？を入れる。

ⓑⅢ文様帯の上向き連弧文は、天王山式土器には一般的ではなく、天王山遺跡にも１点しか確認できない(57)。１本描もあるが（13・31・45・49・50・57・58・60)、２本描が多く（７・９～11・14～24・26～30・33・35・42・44・48・52～55・59・61・62)、３本描（32・37・40～43・59）もみられる（注15)。38は多条の上向き連弧文。47は上向き・下向きが組み合わさった例、49は上向き連弧文と鋸歯文が併用される。29・(30)・33・35・38は北陸系の器形に上向き連弧文が入れられた折衷土器と考えられる。Ⅲ文様帯とⅡａ文様帯間の区画文には刺突列

表５　六地山遺跡周辺の土器編年

北陸	田嶋	古津八幡山遺跡		六地山遺跡	福島中通り
戸水B式					
猫橋式	V-1 V-2 V-3	SX1005	13次７TSD03S10	六地山遺跡	天王山遺跡天王山式古 天王山遺跡天王山式新
法仏式	2-1 2-2	SX1004			明戸式

(15)、交互刺突文（10・22・40・53・58・62）もあるが少なく、数条の沈線を入れる例が大半である。同一個体に用いられる交互刺突文は、真上から刺突する例よりも方向を変えて刺突するハの字状交互刺突文や台形状の例が目立つ（７・10・40)。天王山遺跡の56はⅠ文様帯下端を下向き連弧状にする例だがハの字状交互刺突文を入れている。

ⓑⅢ文様帯の上向き連弧文と共に用いられる構図としては、Ⅱａ文様帯の重菱形文（14・15・18・24・26・28・37・44・45・49)、Ⅱ文様帯のＳ字状連繋文（44・59)、円台形連結文（７）がある。46は重菱形文と円台形連結文を入れる例、44は重菱形文とＳ字状連繋文を入れる例である。

本遺跡のＡ東北系列の特徴として挙げたⓒ２本描や３本描の沈線文で文様を描くこと、必ずしも同時施文とは限らないとしたのは、このように連弧文や弧線文の施文法としての特徴でもある。ⓓ縄文原体の側面押圧は36・51にあるようにⓁ原体で用いられる施文法で、天王山遺跡でも多数確認できる〔中村2001〕。

図26の例をみると、屋敷式・明戸式あるいは天王山遺跡天王山式以降に認定される例がほぼないことがわかる。むしろ、天王山遺跡天王山式以前とすべき事例、中期終末かと思われる例が多い。

前述のように、本遺跡のＤ北陸系列は後期前半の猫橋式併行期、北陸編年のＶ-１期～Ｖ-３期併行と考えられる。Ａ東北系列は交互刺突文がないことから、天王山遺跡天王山式以後とする説が多かったが、諸特徴の比較から天王山遺跡天王山式以前と考えられる。よって、Ａ東北系列とＤ北陸系列は概ね同時期に共伴していたと考えられよう。また、Ａ東北系列とＤ北陸系列の折衷土器がみられ、高杯・器台がＡ東北系列にないことから、両系列群の器種は一部で補完関係にあったと言えるであろう。

本遺跡では砂山遺跡の特徴である重菱形文土器が１点もみられなかった。重菱形文が中期終末の宇津ノ台式土器に由来するなら砂山式と時期的に一部併行関係にある六地山遺跡にあってもよいのだが、六地山遺跡になかった意義は大きい。今後の課題としておきたい。

（渡邊朋和）

注

注１　この他に、〔上原・磯崎1968〕・〔武田ほか1960〕に掲載された上原甲子郎氏所蔵資料があると思われるが、現在は確認することができない。また、畠山祐二氏採集土器が〔新潟市史編さん原始古代中世史部会編1994〕で図化されている。

注２　長岡市立科学博物館には座布団に結び付けられた石鏃７点と剥片が多数ある（図25)。剥片は156点あり、石材はほぼ全て流紋岩もしくは頁岩と考えられる。真島衛氏資料の中に石鏃は確認できなかった。新潟市史には石鏃を主とする石器66点が掲載されているが、多くが地元曽和で採集された資料である。

注３〔関2005〕に掲載されている六地山遺跡現況測量図は関氏から提供を受けた図と同じものである。

注４〔上原1954〕に「縄文ある弥生土器に伴うものと考えられるものに石器では石鏃多数、この中にはアメリカ型石鏃あり、石小刀、なお未見だが磨製石斧もある由である。土製品には紡錘車が二例あり、内一個には土器と同様の縄文が施してあるのは注目に与する。又土師乃至須恵に伴うべきものとして直刀が一口出土している。」とあり、それによったものであろうか。

注５　当時の文献としては〔上原1954〕・〔金塚1956〕などがある。上原は六地山遺跡を「曽和遺跡」と呼んでいた。〔真島1954〕には六地山遺跡の記載はなく、発掘調査以前の文献では〔上原1954〕が最も記載が具体的なので、真島が初めて遺跡を訪れたのは〔上原1954〕の後かもしれない。なお、六地山遺跡の調査経緯等については、故関雅之氏よりご教示を受けた。

注６　発掘調査の経緯は〔中村1995〕が詳しい。

注７　古津八幡山遺跡では縄文地文ではなく、ハケメ地文の土器で東北系土器の要素が入った土器を、Ｃ群在地折衷系としたから、これらもＢ群東北系に加えるならさらに比率が上がることになる。

注８　上開きの弧線・連弧文を上向き、下開きの弧線・連弧文を下向きとする。

注９　48の縄文原体は『日本先史土器の縄紋』〔山内1979〕の図版15の５の復元原体と同一である。縄文原体について鈴木正博氏のご教示を得た。

注10　前者は岩手県域にはほぼない。天王山遺跡でみられる前者は日本海側経由の可能性が高い。

注11　石川日出志氏・前山精明氏よりご教示を得た。

注12　1961年に提出された『日本先史土器の縄紋』〔山内1979〕にも「この種のⓁ条を用いた斜位圧痕は越後、能登にも発見され、相互に一脈の関連を持つものの如くである。」と同様の記載がある。山内は1957年８月19日～20日に長岡市立科学博物館を訪れて、科学博物館が発掘調査した新資料を見ているので〔中村1995〕、第１次調査直後の小瀬が沢洞窟だけではなく、六地山遺跡の資料も実見している可能性が高い。この他、高岡市氷見洞窟や小松市大野山遺跡出土の天王山式土器を念頭においての記述であろう。

注13　六地山式を天王山式土器よりも新しく位置づけ、畿内第Ⅴ様式に併行させるとする中村編年は、天王山式を中期説とする根拠となり、新潟県内のみならず、富山県や石川県でもその後の「通説」になった。

注14　古津八幡山遺跡では天王山式系列と北陸系・折衷土器が遺構内で共伴しており、北陸の弥生後期編年との併行関係がわかる〔渡邊2004〕。遺構の前後関係は以下の①→②→③である。①外環濠Ｃ中層SD03Ｓ10から田嶋Ｖ-３群の北陸

系甕が出土。②方形周溝墓SX1005は外環濠Ｃの外側に造られた墓で、周囲から出土土器は天王山式系が主体。Ⓡ横走縄文が目立つ。Ⅰ文様帯下端のみ交互刺突文を残すが、ほかは円形竹管状工具による交互刺突、刺突列、押引状沈線・波状文となる例がある。口縁部が外傾し伸長する例では屋敷遺跡に類例が多い。③方形周溝墓SX1004は、SX1005と一本の溝を共有して造られた墓。周溝の形態からSX1005が古くSX1004が新しいと断定できる。また、溝覆土中に環濠掘削土が堆積しており外環濠よりも新しい。出土土器は田嶋２－１群の北陸系土器８点に折衷土器４点が伴う。方形周溝墓SX1005には北陸系土器は伴わないが、外環濠ＣとSX1004方形周溝墓の間に位置づけられる。すなわち、田嶋編年Ⅴ－３期と２－１群の中間、猫橋式と法仏式の間である。SX1005の天王山式系列が「天王山式」を２分した場合の新相よりも新しい。所謂明戸式・屋敷式に接点を有する段階と考えられる。

注15　新潟市東区石動遺跡ではⅢ文様帯上端に３本描施文具で波状文を描くものがあるが、施文方向はほぼ全て左から右である。始点と終点が連続しない場合があるが、一筆で描いている。一方で連弧文状になっているものは施文方向が左から右だが、施文順位は右から左になっている。右側の弧線の左端を左側の弧線の右端の沈線が切っている例が多い（図26-23～26）。図面にすると似ているようにみえるが、施文の意識は全く違うのであろう。

資料の所蔵者・機関である嶋邦子氏、故関雅之氏、長岡市立科学博物館、新潟市歴史博物館には格別のご配慮により掲載の許可をいただいた。末筆ながら感謝申し上げます。

また、資料調査をするにあたり、多くの方々・機関からご教示・ご協力いただいた。記して謝意を表したい。

相澤清利・赤坂朋美・赤澤徳明・石川日出志・磯部保衛・伊東格・井上雅孝・上野章・岡本淳一郎・小野明・加藤由美子・金子昭彦・小林隆幸・小林達雄・小林克・風間栄一・菅野紀子・北林雅康・楠正勝・坂下博晃・齋藤瑞穂・坂井秀弥・笹澤正史・佐藤祐輔・佐藤由紀男・清水香・杉山大晋・鈴木功・鈴木正博・高田和徳・滝沢規朗・鶴巻康志・中村五郎・野田豊文・久田正弘・藤塚明・細辻嘉門・松島悦子・水澤幸一・森田賢司・安田隼人・山川史子・吉井雅勇・吉田博行・渡邊美穂子

石川県埋蔵文化財センター・一戸町教育委員会・岩手県埋蔵文化財センター・鹿角市教育委員会・小坂町教育委員会・新発田市教育委員会・胎内市教育委員会・高岡市教育委員会・滝沢市埋蔵文化財センター・富山県埋蔵文化財センター富山市埋蔵文化財センター・長野市埋蔵文化財センター・中能登町教育委員会・七尾市教育委員会・福島県文化センター白河館・村上市教育委員会

（五十音順・敬称略）

図26
○新潟県　1～3：堂の前、4：滝ノ前、5～10：砂山、11・12：長松、13：道端Ⅴ、14：中曽根、15～17：山草荷、18～22：王子山、23～26：石動、27：草薙、28：山口、29：八幡山、30：五斗田、31・32：堅正寺、33～36：五千石、37・38：松ノ脇
○富山県　39・40：二ツ塚、41・42：頭川、43・45：下老子笹川、44：加納谷内
○青森県・秋田県　47：家ノ前、46・48・49：はりま館、50：案内Ⅴ遺跡、51：猿ケ平Ⅰ遺跡、52・53：館の上館、54・55：小谷地
○福島県　56・57：天王山、58～60：和泉、61・62：能登

引用・参考文献

相澤清利　2013「天王山式と続縄文土器の南下」『東北南部における弥生後期から古墳出現前夜の社会動向－福島県湯川村桜町遺跡資料見学・検討会－予稿集』

甘粕健・小野明ほか　1986『六地山遺跡－1982年発掘調査を中心に－』新潟市教育委員会

石川日出志　1989「長岡市堅正寺遺跡の弥生式土器と石器」『北越考古学』第２号

石川日出志　1990「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』第３号

石川日出志　2000「天王山式土器中期説への反論」『新潟考古』第11号

石川日出志　2001「弥生後期湯舟沢式土器の系譜と広がり」『北越考古学』第12号

石川日出志　2004「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』第120号

石川日出志　2005『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年　研究成果報告書』

井上雅孝ほか　2008『滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第Ⅲ集　仏沢Ⅲ遺跡－平成２年度発掘調査報告書－』滝沢村埋蔵文化財センター

岩本義雄・天野勝也・三宅徹也　1979『青森県立郷土館第６集　宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県郷土館

上原甲子郎　1954「越後平野に於ける最近の考古調査」『佐渡史学会々報』第１輯　佐渡史学会

上原甲子郎・磯崎正彦　1968「北陸地方Ⅱ」『弥生式土器集成本編２』東京堂出版

宇部則保　2007「古代東北北部社会の地域間交流」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館

大坂拓・福田正宏　2005「尾白内貝塚の続縄文土器について」『北海道考古学』第41輯

大坂拓　2007「恵山式土器の編年－北海道南部における続縄文時代前半期土器編年の再検討－」『駿台史学』第130号

大越正道ほか　1990『福島県文化財調査報告書第242集　東北横断自動車道遺跡調査報告書10　能登遺跡　南原Ｂ遺跡　村西遺跡　大村古墳群』福島県教育委員会

笠井崇吉ほか　2018『平成30年度指定文化財展図録　白河市天王山遺跡の時代』福島県文化財センター白河館

加藤学ほか　2001『新潟県埋蔵文化財調査報告書第106集　松影Ａ遺跡』新潟県教育委員会

木本元治ほか　1991『福島県文化財調査報告書第263集　東北横断自動車道遺跡調査報告13　和泉遺跡　横沼西遺跡』福島県教育委員会

金塚友之亟　1956「四、六字山その他の土器」『高志路』３期27号

楠正勝　1996『金沢市文化財紀要119　西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市教育委員会

坂井秀弥ほか　1983「内越遺跡出土土器の越後における編年的位置」『内越遺跡』新潟県教育委員会

坂井秀弥　1985「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史研究』

佐藤友子ほか　2009『新潟県埋蔵文化財調査報告書第203集　一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ　庚塚遺跡　狐塚遺跡』新潟県教育委員会

鈴木正博　1976「十王台式理解のために（2）」『常総台地』８

鈴木正博　2014ａ「「砂山」崩し－いつやるか今でしょ！－」

『利根川』36　利根川同人会
鈴木正博　2014ｂ　「「山草荷２式」に学ぶ－「十王台式」研究法は「山草荷式/天王山式文様帯変遷問題」を超えられるか－」『福島考古』第56号
関雅之　2005　「Ｖまとめ　１砂丘遺跡の実相と変容」『新潟県豊栄市甲山遺跡』豊栄市教育委員会
高田和徳　1984　『一戸町文化財調査報告書第７集　上野遺跡－昭和58年度発掘調査報告書－』岩手県二戸郡一戸町教育委員会
高橋和樹ほか　1976　『瀬棚南川遺跡』瀬棚町教育委員会
高橋潤・葛西励　1979　『家の上遺跡・外崎沢（１）遺跡』脇野沢村教育委員会
高橋與右衛門　『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第214集　岩崎台地遺跡群発掘調査報告書』1995
滝沢規朗・野田豊文ほか　2003　「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相－村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡－を中心に」『三面川流域の考古学』第２号
滝沢規朗　2005　「土器の分類と変遷－いわゆる北陸系を中心に－」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現　第１分冊』新潟県考古学会
滝沢規朗　2014　「続縄文土器と在地土器の併行関係－越後の事例を中心に－」『古墳と続縄文文化』高志書院
武田克忠ほか　1960　「第３章　近郷の遺跡」『内野町誌』内野町
田中耕作・石川日出志ほか　2018　『山草荷遺跡出土の弥生土器　新発田市指定有形文化財（考古資料）』新発田市教育委員会
田辺早苗　1991　『神林村埋蔵文化財報告第３　長松遺跡発掘調査報告書』神林村教育委員会
坪井清足　1958　「福島県白河市天王山遺跡」『弥生式土器集成資料編１』東京堂出版
寺村光晴　1960　「越後六地山遺跡」『上代文化』第30輯　國學院大學考古学会
中村孝三郎　1960　「弥生式　六地山遺跡」『NKH　長岡市立科学博物館友の会会報』Vol.2-No.4
中村孝三郎　1966　『先史時代と長岡の遺跡』長岡市立科学博物館
中村孝三郎　1995　『市史双書№30　越後発掘遺跡－想い出の史蹟・想い出の人々－』長岡市
中村五郎　1983　「東北中・南部と新潟」『三世紀の考古学　下巻』学生社
中村五郎　2009　「天王山式土器メモ2008年」『福島考古』第50号
中村五郎　2010　「天王山式六十年」『坪井清足先生卒寿記念論文集－埋文行政と研究のはざまで－』
中村五郎ほか　2011　「油田Ｙ期とその周辺－会津地方の天王山式以前の諸段階－」『福島考古』第53号
中村五郎　2001　「80天王山遺跡」『白河市史第４巻　資料編１　自然・考古』白河市
新潟市史編さん原始古代中世史部会編　1994　「第３章　弥生時代」『新潟市史　資料編１　原始古代中世』新潟市
新潟県　1983　『新潟県史　資料編１　原始・古代１　考古資料編』新潟県
野田豊文　2005　「三面川流域における弥生時代の終わり－天王山式土器から見た新潟県内弥生後期の様相－」『三面川流域の考古学』第４号
野田豊文　2009　「新潟県内の弥生時代後期東北系土器群像」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
藤田定一　1951　『天王山式土器の紋様図集』白河農業高等学校歴史研究部
前川雅夫ほか　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第162集　日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＶ　道端遺跡Ⅴ』新潟県教育委員会
前山精明・相田泰臣　2002　『南赤坂遺跡－縄文時代前期～中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査－』巻町教育委員会
真島衛　1954　『西蒲原郡内遺跡地名表　第壱報』
丸山一昭　1998　『和島村埋蔵文化財調査報告書第６集　松ノ脇遺跡』和島村教育委員会
水澤幸一　1998　『中条町埋蔵文化財調査報告第15集　兵衛遺跡・四ツ持遺跡』中条町教育委員会
谷内尾晋司　1982　「北陸地方の墓制」『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』第11回埋蔵文化財研究会資料
八木光則　2004　「蝦夷考古学の地平」『古代蝦夷と律令国家』高志書院
山内清男　1964　「日本先史時代概説」『日本原始美術１　縄文式土器』講談社
山内清男　1979　『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
弥生時代研究会編　1990　『「天王山式期をめぐって」の検討会』
渡邊朋和　2001　「第Ⅶ章　まとめ」『八幡山遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
渡邊朋和　2004　「Ⅵ章　まとめ」『八幡山遺跡群発掘調査報告書　第11・12・13・14次調査』新津市教育委員会
渡邊朋和　2016　「（５）六地山遺跡　第11次調査」『新潟市文化財センター年報』第３号　新潟市文化財センター
渡邊朋和・立木宏明ほか　2001　『八幡山遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
渡邊美穂子　2008　『新発田市埋蔵文化財調査報告第36　王子山遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会